

富山県

砺波市巖照寺遺跡

緊急発掘調査概要

1977年3月

富山県教育委員会

# 発刊にあたって

昭和51年度国庫補助金の交付を受けて、実施された砺波市嚴照寺遺跡緊急発掘調査が終了いたしました。今回の調査では、特に縄文時代中期前葉の遺構・遺物が数多く発見され、県内の同時代の研究に多大な成果をおさめました。

調査は、地元砺波市をはじめ梅塙野地区の協力と、多数の人々の参加を得て実施されました。ここに、御助力下さいました関係各位に対して、心より謝意を申し述べます。

なお、今回地元の深い御理解のもと遺跡の大半が保存されることになりました。本書がさらにこのような遺跡に対する理解と保護の一助となれば幸いです。

昭和52年3月

富山県教育委員会

## 目次

### 発刊にあたって

### 例 言

### 例 言

I 地形と周辺の遺跡	1
II 調査に至るまで	1
第1図 地形と周辺の遺跡	1
第2図 地形及び区割図	2
III 調査の概要	3
1 調査の経過と層位	3
第1地点	3
第2地点	3
第3地点	3
2 遺構	4
第1地点	4
第3図 第1地点遺構概略配置図	4
第4図 遺構実測図	5
第2地点	6
第5図 第2地点遺構概略配置図	6
第3地点	7
第6図 第3地点遺構概略配置図	7
3 遺物	7
縄文時代の土器	7
第7図 上器実測図	9
第8図 土器実測・展開図	10
第9図 土器実測図	11
第10図 土器展開図	12
第11図 土器実測・展開図	13
第12図 土器実測・展開図	14
第13図 土器実測・展開図	15
第14図 土器実測・拓影図	16
縄文時代の上製品	16
第15図 土製品実測図	17
縄文時代の石器	18
第16図 石器実測図	18
第17図 石器実測図	19
平安時代の土器	20
第18図 第1地点出土の須恵・土師器	20
V まとめ	20
参考文献	20
表1 遺構計測表	21

### 図版目次

図版第1 第1地点	図版第5 上器
図版第2 第2地点	図版第6 土器
図版第3 第3地点	図版第7 土製品・石器
図版第4 上器	図版第8 石器

### 例 言

1 本書は、昭和51年9月16日から11月10日まで行った富山県砺波市嚴照寺遺跡緊急発掘調査概要である。

2 調査は、富山県教育委員会が主催し、文化庁記念物課の指導と砺波市教育委員会・梅塙野土地改良区の協力を得て実施された。

3 貢献参加者は次のとおりである。

富山県教育委員会文化課神保浩造、岡本進一、松本季治(以上調査担当者)酒井重洋、富山考古学会会員高橋久雄(以上調査員)砺波市教育委員会老松邦雄、地元永田信一、若森勝次、山本与吉、山本庄作、島田忠子、島田忠子、田上道子、河辺由理子、中川千鶴子、平岡清住、森翠子、荒井よし子、西村美代子、石田敏子、中村エイ、荒川まさの、信田きみ子、水田みみ、荒井外枝、木山公乃、山本みさを、山本タマ、荒井さく、堀田ハリ、米山修子、中間優文子、山崎登志子、若林すみ子、川岸勝枝、西村美代子、前田明美、富山大学歴史研究会斎藤辰夫、舟戸真之、中出俊義、中林公弘、北上真二。

事務局は文化課に置き、課員の協力を得て森田丈夫が座席に当たり、岸本雅敏が涉外を担当し、課長吉沢正敬、課長代理清水常信が統括した。

4 調査期間中、文化庁記念物課小林達夫、県文化財保護審議委員佐伯安一尚氏の指導を得た。また、調査の実施から調査後の遺物整理まで一貫して金沢美術工芸大学講師小島俊彰、橋本正尚氏の助言、指導を得た記して謝意を申し述べる。

5 今回の整理・編集・執筆は神保、岡本・松本が分担して行ない、各々の責は文京末に記した。

なお、土器の復原については、富山大学生寺沢信行の協力を得た。

## I 地形と周辺の遺跡

嚴照寺遺跡は、富山県砺波市福岡字大谷及び宮森新字大谷島地内に所在する。

本遺跡は、砺波市街より東方向約6km、芹谷野段丘の西側の縁辺部に位置する。この段丘は、庄川の隆起扇状地であり、その東側には、和出川が流れ、その背後には、小高い山々が東西に連なっている（新藤1965）。

本遺跡は、庄川とは30mの比高差を持ち、標高約80mを測る。現地形には、起伏がほとんどないが、調査してみると、北側及び南側に浅い谷があり込んでいたことが分った。遺跡は、水田と一部分畑地であったが、現在、耕平され、すべて水田になっている。

周辺の遺跡としては、宮森新北島I遺跡（縦文時代・奈良～平安時代）及び宮森新天池遺跡（縦文時代中期）が、この芹谷野段丘の西側及び東側の縁辺部にある。嚴照寺遺跡より一段低い段丘上には、宮森新大谷島遺跡（縦文時代中期～晚期・奈良～平安時代）がある。さらに、芹谷北秘念寺遺跡（縦文時代中期中葉）が、和田川の河岸段丘の最下位の段丘上にある。また、時代は異なるが、増山窯跡（平安時代）や山城の増山城（中世）が知られている。

さて、庄川の水源は飛驒地方の分水嶺にある。庄川は、その分水嶺によって神通川さらに信濃川とも通じており、川を介しての人・物の往来が見られる。そのため、庄川流域の遺跡にも、その影響が読みとれよう。（岡上）

注① この点、橋本正氏の指摘を受けた。

注② 市内では、嚴照寺遺跡の時期（縦文時代中期前業）において、新造式系統の土器の収入が見られる。

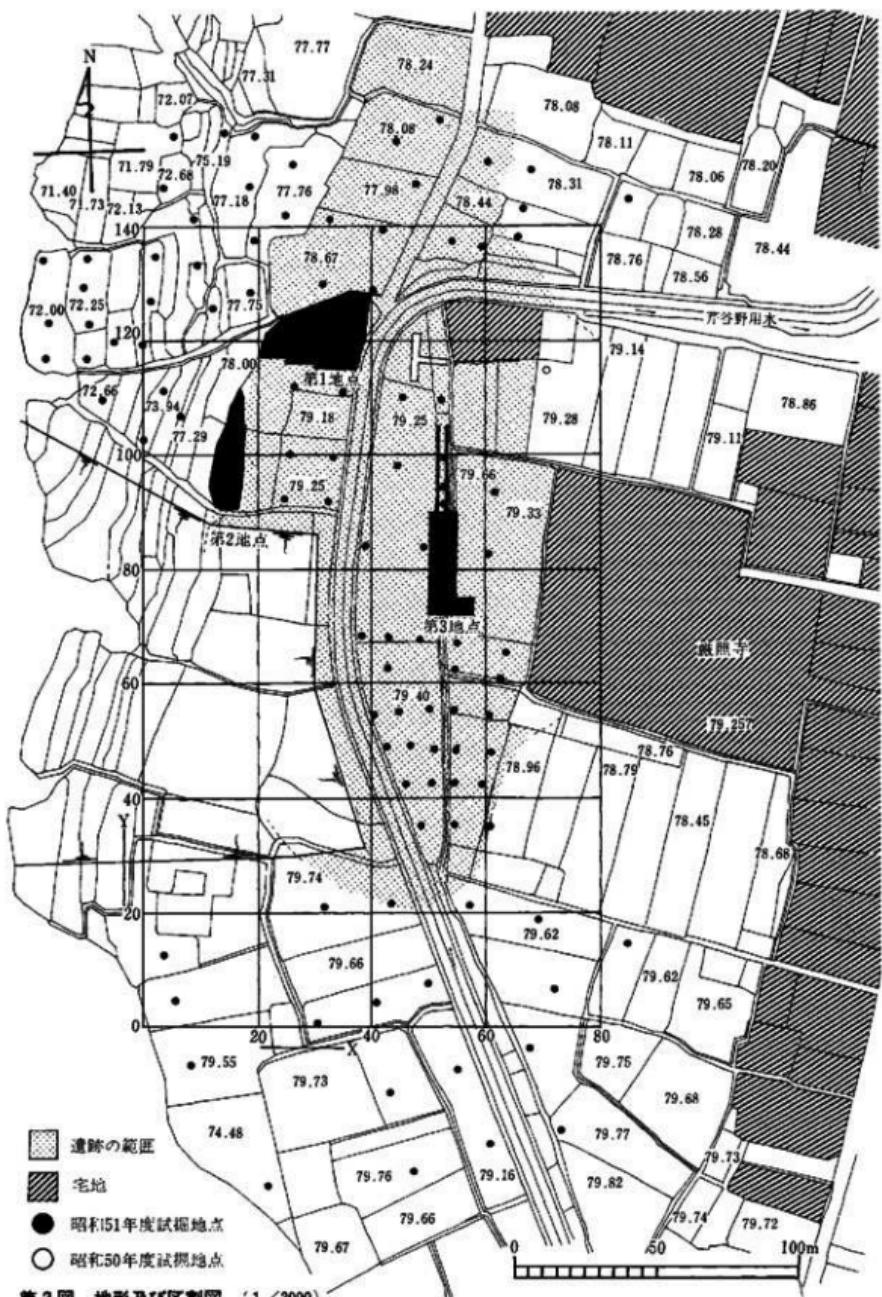
## II 調査に至るまで

嚴照寺遺跡が位置する芹谷野段丘の開拓は、寛文三年（1663年）から開始された芹谷野用水の開きくに始まり、この工事とともに本遺跡が所在する宮森新を含めた25余りの新村が作られている（佐伯1965）。以後、近代にいたって、古代人の住んだ跡として人々の関心を集めていると考えられる。近年になって名越仁風氏をはじめとした地元研究者の動きや、富山考古学会の見学会〔富山考古学会1951〕もあって縦文時代中期の大規模な遺跡として世に知られるようになった。

昭和50年、梅塚野上地改良区によって梅塚野地区田代官は場整備事業が開始された。この事業は、4ヶ年に渡って実施されるものであり、昭和51年度工事区には嚴照寺遺跡の一帯も含まれるものである。これを知った県教育委員会と砺波市教育委員会は、地元上地改良区と協議をかね、昭和50年12月に砺波市教育委員会が第1次の試掘調査を行った。さらに、翌年5月・7月には、県教育委員会と砺波市教育委員会が、昭和51年度のは場整備工事区内の遺跡分布、試掘調査と併用した第2次調査を行った。この後、調査結果に基づき再度、上記の三者間で協議を行ない、工事の設計変更によって遺跡の大半を水田下に保存した。しかし、一部設計変更が不可能な箇所として、三地点計約1,300m<sup>2</sup>が生じたため、それを対象とした本調査を昭和51年9月～11月にかけて行うことになった。（神保）



第1図 地形と周辺の遺跡 (1/50,000) 1. 嶽照寺 2. 宮森新大谷島 3. 芹谷北秘念寺 4. 宮森新北島I  
5. 宮森新天池 6. 増山窯跡 7. 増山城跡



## 第2図 地形及び区割図 (1/2000)

### III 調査の概要

#### 1 調査の経過と層位

調査は、第1・2次の試掘調査と本調査に区分される。

第1次試掘調査は、昭和50年12月21日に行なわれた。しかし、一部遺跡の遺存状況を確認しただけで、遺跡の全容はつかみがかった。このため、第2次試掘調査は、遺跡の範囲・内容の把握を重点とし、昭和51年5月17日～19日、6月30日～7月15日の二度に渡って実施した。調査は、工事実施区域を対象に1m<sup>2</sup>の試掘区を各々約10m間隔で設定し、計98ヶ所の排上を行った。一部、遺構確認のために1m幅のトレンチを数本併用する。その結果、東西約200m、南北約300mの範囲で遺物の散布が見られ、4～5ヶ所で住居跡・穴など遺構を確認した。

本調査は、前章で記したような経過を経て、昭和51年9月16日～11月10日にかけて実施した。

調査は、まず遺跡全体を対象として東西80m、南北140mのグリッドを組み、調査箇所である三地点を第1～第3地点と呼称して開始した。

##### 第1地点（第2図、図版第1）

調査は、試掘調査の結果から各区の層位がほぼ同一であること、出土遺物が遺構覆土内に集中することが認められたので、一区画を10m×10mの大区画として作業を進めた。耕土は、遺物出土層の上面及び遺構上面で止め、以下遺構ごとに調査を行った。発掘面積は、約650m<sup>2</sup>である。

各区の層位は、調査地点が水田のためかほぼ同一であり、基本的に次の五層に分割される。第I層（15～20cm）、第II層（5～8cm）は、水田耕作に関係したもので、第II層は水田の床土である。第III層（20～25cm）は、黒色土であり、色調・混入物によってIIIa層（10～20cm）とIIIb層（5～10cm）に区分される。IIIa層は、IIIb層より色調が明るく、粒状の酸化鉄分が混入している。IIIa層がかなり変動的な厚さを示すことを考慮すれば、区分の原因は、水田耕作や整地に起因するものと考えられる。第IV層（5～15cm）は、第V層（地山）の黄褐色粘土層とはほぼ同色であり、漸移層的なものである。表土から地山までの深度は、調査区南東部では30～40cmと浅く、逆に北西部では60～70cmと深い。現況は、ほぼ平坦な地形を示すが、もとはやや北西に傾斜する地形であったことが推定できる。

遺物包含層は、第III～V層である。しかし、大半の遺物は、第4号住居跡と第5号住居跡付近に集中し、特に住居跡の覆土内（上面では、第III層との区分不明瞭）へ密接する傾向が認められた。その出土状況は、住居跡床面から數cmもうきあがりいわゆる吹上バターン（小林1968）を示した。（神保）

##### 第2地点（第2図、図版第2）

第1地点と同じ作業手順で、西側の崖際まで掘り進めた。

地形は、北側へ緩やかに傾斜しているため、水田耕作時に少し平坦にならされたのではないかと考えられる。

層位は、I層（5～10cm）、II層（5～10cm）、IIIa層（5～10cm）、IIIb層（5～10cm）で、IIIa層はY100列以北の場所に見られた。V層は、所々、わずかに確認されるだけで、すぐV層に至る。I層からV層上面までは、20～40cm程である。

遺物は、IIIb層から多数出土した。その密集地区は、住居跡付近とX12Y92～102の崖線である。前者は、住居跡の覆土内に密集する傾向があり、その出土状況は、床面より若干浮き上がる、いわゆる吹上バターン（小林1968）を示した。後者は、20cm程の厚さで堆積しているが、下部に行く程少なくなる状況である。

なお、発掘面積は、220m<sup>2</sup>であった。

##### 第3地点（第2図、図版第3）

作業は、第1地点と同じ手順で行った。

この地点は、水田と畑地に利用されていた。水田の場合は、削平され平坦になっているが、全体的に地形は、南側へ緩やかな傾斜を示す。

層位は、水田の場合、I層（10～15cm）、II層（5cm）で、IIIa層がなくIIIb層（5～20cm）となり、V層（5～10cm）は、主としてY76列以南に見られ、V層に至る。I層からV層上面までは、20～45cm程である。畑地（X52～54Y81列以北）の場合、I層（5～10cm）は耕作土、2層（10cm）は灰褐色土、遺物包含層の3層（5～15cm）は黒褐色土で、V層に至る。I層からV層上面までは、20～35cm程である。

遺物は、穴の覆土内に密集している。その出土状況は、底面より若干浮き上がる石塚バターン（橋本1971）を示す。

なお、発掘面積は、約400m<sup>2</sup>であった。

（岡上）

## 2 造構

検出した造構は、縄文時代の住居跡10棟、平安時代の住居跡1棟、穴75ヵ所、他に埋葬施設と考えられる埋葬1ヵ所である。

縄文時代の造構は、全て中期前葉に位置づけられるが、一部造構の重複及び形態の違いが認められるため時期的細分も考えられる。この点については、後日に譲ることとし、以下、各地点の造構を概観しておく。

### 第1地点（第3・4図、表1、図版第1）

造構は、縄文時代の住居跡6棟と平安時代の住居跡1棟、他に穴が53ヵ所で検出された。各造構の配置は、住居跡が台地の縁辺部を中心に立地し、穴は調査区東側に多く認められる。

#### 住居跡

第4号住居跡は、第10号・11号住居跡と重複しており、現時点では、住居跡の形態や時期的なことは不明瞭である。しかし、恐らくは以下に示す第5号住居跡に類似しよう。

第5号住居跡（第4図）は、北側を用水によって切られているが、遺存状況は良好であり、覆土1:部に多景の遺物が含まれていた。住居跡の形態は、城端町西山B遺跡検出の住居跡【上野他1976】と同様の7木主柱長円形XY型である。長軸約6m、短軸約4.4mの規模であり、住居跡の中央南側には地床炉、北側には貯蔵穴と考えられる連結状ピットが設けられる。南壁は、第55号穴と重複し、東・西壁に沿って周壁溝がはしる。

その他の住居跡としては、石組炉のみを残す第6号住居跡、平安時代の遺物を伴う第8号住居跡（焼土のみ）を検出した。しかし、いずれも黒色土内に設けられており、周囲を精査したが、柱穴・プラン等は確認できなかった。  
（神保）

註①・② これについては、橋本正氏の基本的な研究がある【橋本1976】。本書は、それに基づいた。

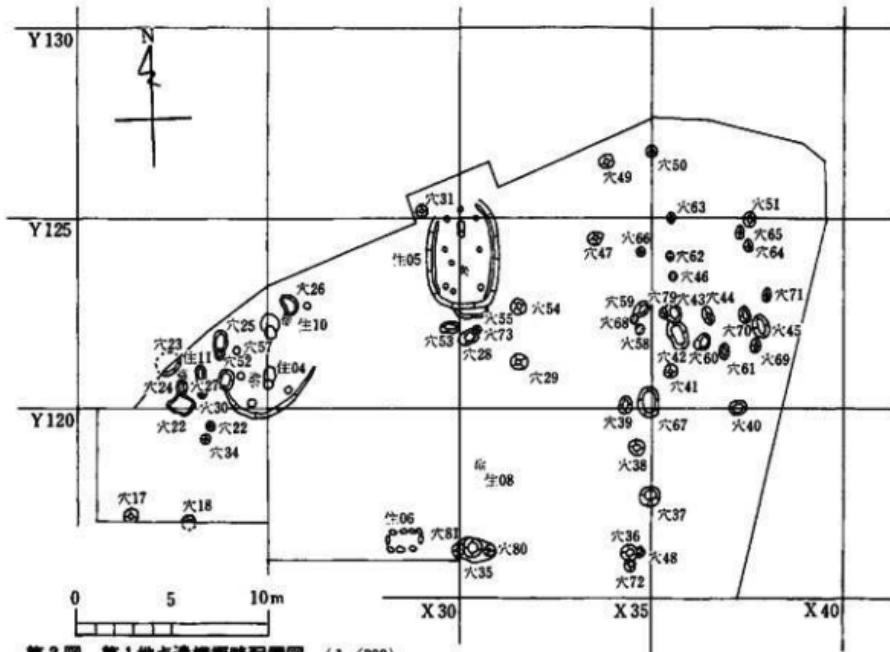
#### 穴

穴は、調査地点東側に集中する一群と、住居跡付近に集中する一群に分けられる。

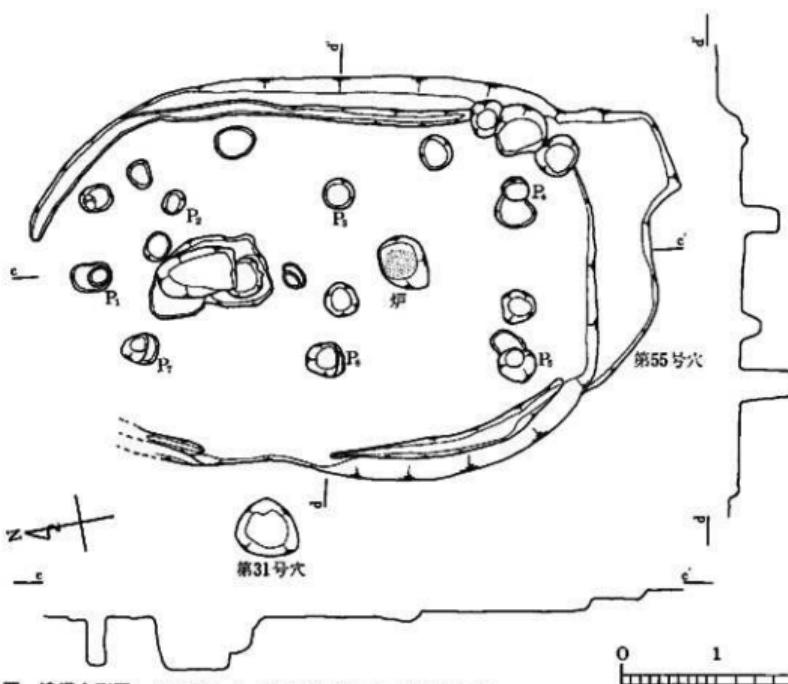
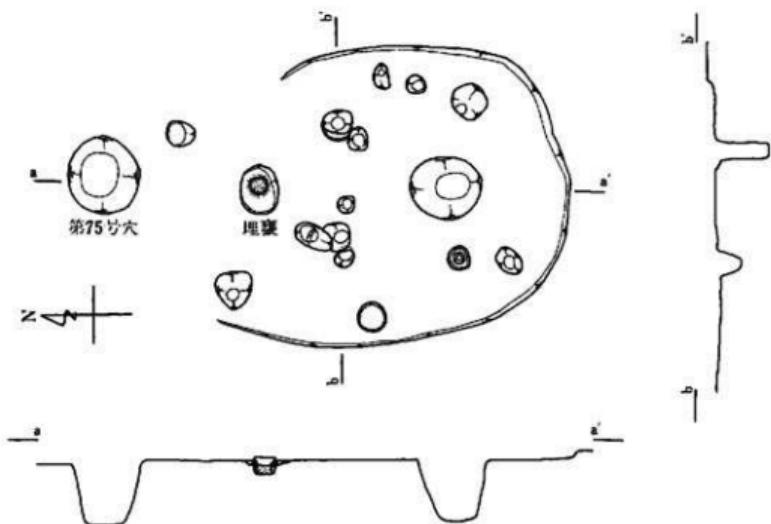
形状は、二大別され壁が垂直に掘られたもの・底が擂鉢状に掘られたものがある。両者は全般的に散らばっている。一部の穴からは、遺物として中期前葉の土器などが出土している。

穴の用途は不明である。

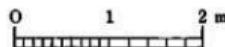
（松本）



第3図 第1地点造構概略配置図 (1/300)



第4図 遺構実測図 (1/60) 上 第1号住居跡 下 第5号住居跡



## 第2地点（第4・5図、表1、図版第2）

遺構には、住居跡4棟といわゆるドーナツ状ピット2ヵ所を含む穴8ヵ所が検出された。いずれも複土内の遺物より、縄文時代中期前葉に属すると考えられる。

### 住居跡

第1号住居跡（第4図）は、その北側の壁面の確認ができる。プランは、明瞭でないが、4m以上×3.1mの楕円形であろう。壁は、垂直に切り落されず斜めになって、そのまま床面に移行している。南側の床面の一部分は、堅くしまっている。住居跡の主軸上に、直徑16cm深さ13cmの洞部以降を切り取った深鉢形土器（第9図4）が設置される。底には土器片がひかれ、周辺及び土器内には焼土が見られる。支柱は、6本主柱X型であろう。住居跡の南部分に75cm×65cmの楕円形をした穴が検出された。この穴の覆土は、炭化物を含んだ黒色土で、住居跡の覆土の中の土器は、床面より若干浮き上がる出土状況を示す。いわゆる吹上バターン【小林1968】をとる。

第2号住居跡は、北西側の壁が確認できず、プランは明瞭でないが、4.6m×3.1mの楕円形であろう。南側の壁面には、テラス状の出張りがあり、中央には、V層を踏みかためた床面がある。柱穴は、壁付近だけでなく、内側にもあり、主柱穴は不明である。炉・焼土は、確認できなかった。

第3号住居跡は、第9号住居跡を切っている。プランは、3.6m×3.4mの楕円形で、V層を5~10cm程掘り込んで床面をつくる。柱穴は、壁面近くをめぐるものと、やや内側をめぐるものがある。炉は、検出されない。中央部付近に黄褐色土が、5cm程盛り上がっている。

第9号住居跡は、西側を第3住居跡により、東側を後世の穴によって切られていたため、プランは、不整形を示す。南北3.8m、東西2.4mを測る。床面は、デコボコで、がれは検出されなかつたが、南側に焼上があった。この焼土の上面は、住居跡床面より5cm程浮いている。

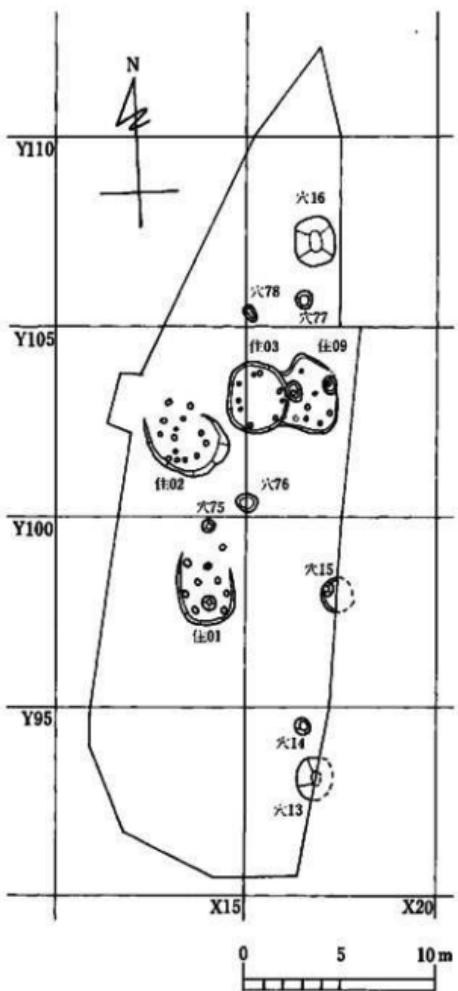
### 穴

穴には、平面が楕円形で断面が指鉢状に掘られたもの（第13・14・15・16・78号穴）、楕円形ないし円形で桶形のもの（第76・73号穴）、円形で円錐状のもの（第75号穴）の三形態が認められる。第13・16号穴は、中央部分が黄褐色土で、その周囲に黒色土が入り込む、いわゆるドーナツ状ピットである。それぞれの穴の用途は、不明である。（岡上）

註① この土器は、後述の歌照寺式に属する。よって、この土器（埋甕）を一構成要素とする第1号住居跡は、中期前葉の古い時期に属するであろう。この土器は、がれ付近に設置される埋甕とともに、火に関係する機能を有するであろう（権田1976）。そのがれ付近に設置される埋甕の例として、中期前葉の不動堂遺跡の第2号住居跡の例がある（小島1974a）。しかし、県内では、本遺跡第1号住居跡のようながれの例は、見あたらないが、長野県あたりでは、中期の埋甕の例がある（飯野他1972）。

註② この穴の覆土から縄文時代中期前葉の土器（後述する土器区分は不明）が出土した。

註③ この住居跡は、柱穴の分布状況から考えても、住居の廃替等々や他の遺構との重複を考えられる。



第5図 第2地点遺構概略配置図 (1/300)

### 第3地点（第6図、表1、図版第3）

遺構としては、中期前葉の住居跡1棟・穴13ヵ所、埋甕1ヵ所を検出した。

第7号住居跡と第3号穴・第11号穴と第12号穴・第7号住居跡と埋甕がそれぞれ近接している。他の穴9ヵ所はやや離れて群在しており、大きく二つのグループにわけられる。

#### 住居跡

検出された住居跡は第7号住居跡1棟である。住居跡の約半分が調査対象区域に入ったため、その部分だけを発掘した。平面形態は明確ではないが横円形をなすと思われる。柱穴は2ヵ所検出された。遺物の出土状態は吹上バターン〔小林1968〕をとり出土量は比較的のくない。

穴は13ヵ所ありその内第1号穴と第3号穴の2ヵ所を除いて、遺物の出土状態は石塚バターンをとる（橋本1971）。その遺物は後述するI～III期のものが混在し、捨て場的出土である。他の2ヵ所（第1号穴・第3号穴）は自然に穴のなかに遺物が流れ込んだものである。

#### 埋甕

調査区の東に位置し、第7号住居跡が付近にある。埋甕は浅鉢形土器を利用しており、上には三角形で厚さ8cm幅25cmの自然石が被されている。埋甕南側にも三角形で厚さ10cm幅30cm自然石が軸をそろえて置かれている。埋甕の出土形態は橋本氏のいう埋甕A種となる（橋本1976）。埋甕用の穴はⅢb層より掘込まれたと考えられ、現況ではⅧ層上面に5cm程度の掘方がある。埋甕の上面は擾乱がはげしく、埋甕の上部にまでおよぶ。また、埋甕内には淡黄色の土が部分的に含まれる。埋甕自体は口縁部から底部付近までのこっており、底部を意識的に尖いている。埋甕が一般的に深鉢形土器を利用している中にあって異例な存在であり、所属時期が中期前葉に属する点とともに、重要な資料といえる。（松本）

### 3 遺物

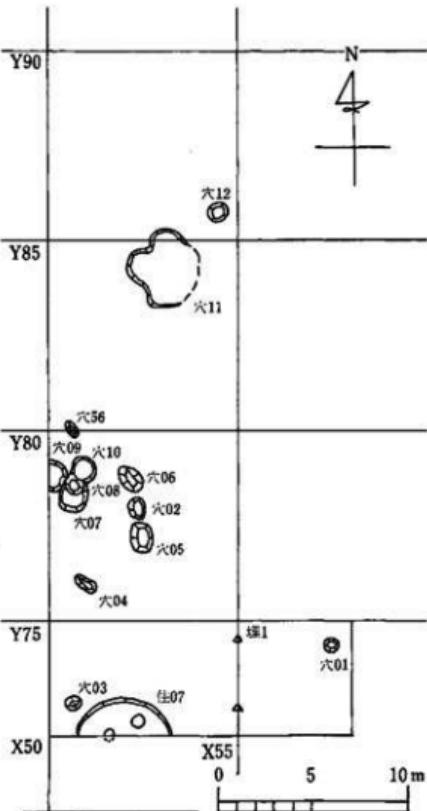
#### 縄文時代の土器

土器は全て縄文時代中期前葉に属し、従来の編年による新崎・上山田古式土器に比定でき、しかも遺構覆土内から混在して出土している。土器の整理に当ってはその点と、両型式の区分が不明瞭なことを踏えて、土器製作第2・第3段階（橋本1968）での技術的な違い、及び遺構と土器群の関係を考慮し三期に区分した。

**土器製作第2段階での区分基準** 器種は、深鉢形と浅鉢形土器の二器種が確認される。深鉢形土器には、口縁部が波状口縁になるもの、平縁になるものの二種がある。波状口縁は、第II期以後に現われ第I期にはない。平縁のものは、円筒形の胴部にキャリバー状の口縁部がつくものと、円筒形のものとに二分できる。前者は、頸部が急激に外反・屈曲するもの（第8図2）、頸部がゆるやかに外反・屈曲するもの（第11図5）、頸部がゆるやかに外反し口辺部が内湾するもの（第14図8）に細分され、後者は円筒形の胴部にやや外反する口縁部がつくもの（第8図3）、円筒形のもの（第9図1）に区分できる。これを前者から深鉢A<sub>1</sub>・A<sub>2</sub>、深鉢B<sub>1</sub>・B<sub>2</sub>と呼称し、波状口縁の深鉢形土器をCとする。

また、各期土器の口唇部形に違いが認められる。口唇部内面に棱を形成しないもの（第8図2）をA、肥厚した棱を形成し後上へ半載竹管文を施すもの（第11図5）をB、肥厚した棱上の内面上部をナデるもの（第14図8）をC種と呼ぶ。

**土器製作第3段階での区分基準** もっとも多用される文様は蓮華文・爪形文であり、時期別に描きか



第6図 第3地点遺構概略配置図 (1/300)

たの変遷を認める。蓮華文は、三角形の抉り込みを施しその間に格子目状沈線を引いて蓮華文風にしたものと、花弁の曲線を半截竹管で施すものに大別できる。さらに、前者は蓮華文風のもの(第7図6)、逆蓮華文風のもの(第7図5)に区分され、後者は花弁の縫幅が短いもの・長いもの(第11図1)、花弁の縫幅が長くその内に引かれる沈線の角が不規則なものに区分できる。これらを前者からA<sub>1</sub>・A<sub>2</sub>型、B<sub>1</sub>・B<sub>2</sub>・B<sub>3</sub>型と呼びかけておく。大局的には、A<sub>1</sub>・A<sub>2</sub>型が古くB<sub>1</sub>・B<sub>2</sub>型→B<sub>3</sub>型へ変化したといえる。

また、本遺跡の土器群に施される爪形文は、すべてC字状を呈する。爪形文は、竹管と土器面の角度と押圧の手法の違いから、竹管を鈍角にあって押し引いたもの(第8図2)をC<sub>1</sub>、竹管を鋭角にあって突刺すように押したもの(第11図5)をC<sub>2</sub>と仮称しておく。C<sub>1</sub>型の爪形文は第I期においてのみ特徴的に用いられ、第II・III期ではほとんど姿を消す。

第I期土器の文様構成は、ほとんど一周4単位である。第II期では4単位を主体とするが2単位の文様構成も現われる。第III期は、4単位の外に明確な2単位の文様構成を持つ個体が増加する。

#### 第I期(第7~9図、図版第4の1~5、図版第6の3・10・11)

器種には、深鉢形と浅鉢形土器がある。いずれも口唇部内面はA種の成形である。深鉢形土器にはA<sub>1</sub>・B<sub>1</sub>・B<sub>2</sub>があり、器厚・法量差もある。文様帯は、口縁部と胴部に分れる。口縁部文様帯は、爪形文C<sub>1</sub>を数条横走させ、縦位の隆帯・突起で区画する。その間を無文帯又は、蓮華文A<sub>1</sub>・A<sub>2</sub>や新保式の系列を引く口縁部文様(第7図3・4)を施す。胴部文様帯は、B字状文を組むもの(第8図3)と斜繩文・縦位羽状繩文・木目状撚糸文(第7図2・5)を施す。他に、口唇部外面へ粘土帯を貼り付けて隆帯とし、隆帯上及び器面全体へ縦位羽状繩文を施すもの(第9図2・7)もある。第8図1・4、第9図9は、他の土器と比べ後述する第II期の様相が強い。浅鉢形土器(第9図10)は、すりばち状の器形で口唇部に爪形文C<sub>1</sub>を施す。

#### 第II期(第10~13図、第14図1・2・4~7、図版第4の6、図版第5、図版第6の1・2・4~9)

器種には、深鉢形と浅鉢形土器がある。いずれも口唇部内面はB種の成形である。深鉢A<sub>1</sub>・B<sub>1</sub>・B<sub>2</sub>の他に肩部が張り、頸部で外反・屈曲するもの(第12図5)、胴部が反るもの(第13図3)があり、第I期にはない深鉢Cも見られる。文様構成が2単位のものは、口唇部から縦位の半截竹管文・隆起線を下す。口縁部文様帯は、数条の半截竹管文を横走させ、その間を無文帯としたり。蓮華文B<sub>1</sub>・B<sub>2</sub>、細かい刻み・綾杉文を施す。これを交互にくり返すもの(第11図2)もある。また、長野県の新道式との関係がうかがわれる個体(第11図3・6)がある。他に器全面へ繩文を施し、頸部及び口縁部に繩文を押圧するもの(第14図7)がある。共伴関係は不明確であるが、東北地方大木系の土器(第14図6)が一片出土しており、押圧繩文を附すなど施文方法に共通点が認められる。第11図7・第13図1~3は、文様構成的に新しい様相を持つ。特に第13図1は、口唇部から爪形文C<sub>2</sub>を持ち2本の隆起線を下し、一方を斜めに頸部へめぐらし尾部を「し字状」にする。後述する第III期の類型的様相を示す。浅鉢形土器には、口縁部がやや外反するもの、やや内反するもの、鋭く内反するものの三種がある。文様は、口縁部に横走した半截竹管文を施しその間を区画し、その中へ蓮華文B<sub>1</sub>・綾杉文・細かい刻みを施す。肩部に渦巻状の隆帯を持つもの(第14図4)もある。

#### 第III期(第14図3・8)

整理途上にあるため、概略的に触れておく。

器種は深鉢形と浅鉢形土器が認められ、いずれも口唇部内面の成形はC種である。深鉢形土器には、A<sub>1</sub>・B<sub>1</sub>・B<sub>2</sub>・Cがあり法量差もある。口縁部文様帯は、第I・第II期にみられた口縁部文様帯(第11図1)の上部が消失・縮小し2~3条の半截竹管文と1条の隆起線になる。胴部文様帯は、第I・II期に比べ複雑化する。一周2単位となる例には、隆起線を斜めに下し、尾部が渦巻くもの、2条の隆起線を下しその間に大きな三叉文・玉だき三叉文・細かい刻みを施すものがある。4単位のものには、隆起線の渦巻によって区画(第14図8)し、その間へ蓮華文B<sub>1</sub>・綾杉文・半截竹管文を施すものがある。基線となる隆起線上は、綾杉文・爪形文C<sub>2</sub>が施される。又、第II期において特徴的であった連続刺突文が半截竹管文間の沈線内へ施される。第III期の特徴的な手法である。この外、第II期にみられた器全面へ繩文を施し、頸部及び口縁部に繩文を押圧するもの、長野県の新道式土器の要素を残すものも存在する。浅鉢形土器の実体については、明確ではないが、第14図3は第14図8と共に、この期の浅鉢形土器と考えられる。

#### 小結

從来、新崎式と呼称されてきた土器群は、高堀勝喜氏によって再検討され、それぞれ新崎式・上山田古式土器に区分された[高堀1970]。しかし、その区分基準は必ずしも明確に示されずこのため小島俊彰氏は、特に新崎式を再検討する動きを示した[小島1974b]。一方、神保・橋本らは、城端町西山B遺跡の土器群を新崎式土器のより古い群として抽出し、新崎式土器の新たな区分基準を示した[神保1976]。

これには、小島氏も賛意を示している。しかし、その後、当初高堀氏が設定した上山田古式と富山県側で理解していた上山田古式の内容に差異があり、高堀氏の上山田古式は富山県側による同式の一部分を示すことが判明し、さらに再々検討する必要が生じた。

巣照寺遺跡出土の土器群に認められた土器製作第2・第3段階での製作技術の違いは、時間差をもって変遷したものであり、これを時期差を有する土器群としてとらえる根拠となる。この点を踏まえ、広義の新崎式土器を再度区分し、内容的にもっともまとまりを有し区分基準も明確な本遺跡出土の土器群を標式として、巣照寺I式・同II式・同III式土器と仮称したい。巣照寺I式土器の比較的まとまった資料は、城端町西山B遺跡〔上野他1976〕・石川県中平遺跡〔沼田1976〕にあり、巣照寺II式土器は、宇奈月町愛新新遺跡〔漆・竹内1971〕・朝日町下山新遺跡〔小島1973〕・朝日町不動堂遺跡〔小島1974a・b〕にある。巣照寺III式土器は、富山市杉谷遺跡〔小島1976〕・宇奈月町浦山寺藏遺跡〔酒井・橋本1977〕などにその例が認められる。

以上、前述した区分は現時点での見通しであるが、それぞれの分布もかなり広範囲であると予想できる。また、朝日町下山新遺跡〔小島1973〕の土器群には巣照寺II・III式を含む可能性があること及び前後の土器群との関係は、今後に残された問題である。(神保)

註① 第11回3・5・6・8の土器は、同一ピット内から一括出土しており、同一時期のセット関係を示すものと考えたい。

註② 土器群の区分方法ならびに整理に当っては、小島俊彰・橋本正尚氏より有意義な教示を得た。

註③ この点の基本的考え方については、先に論述している〔神保1976〕。このため本書では、具体的には触れない。

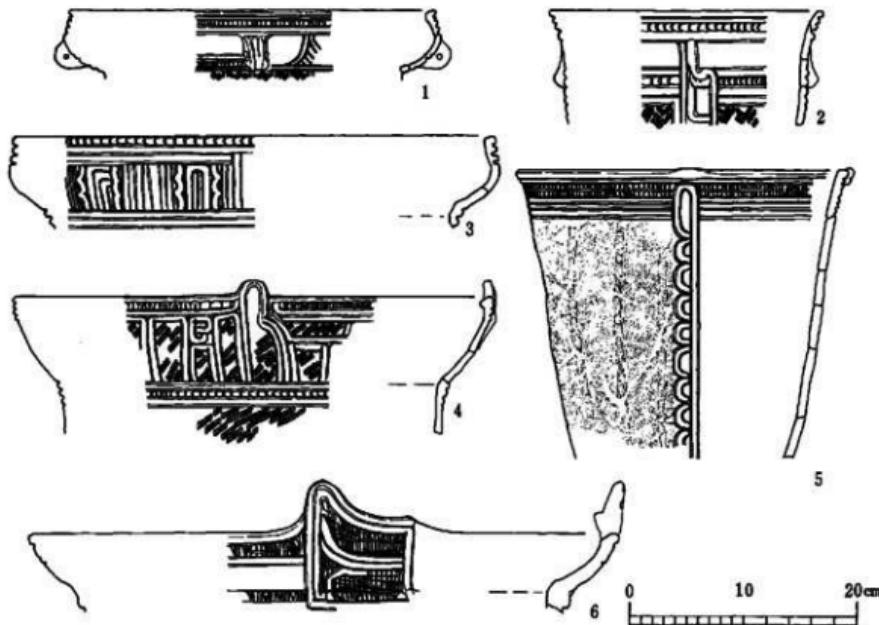
註④ 鹿島文については、古くから形態的な違いから各種の分類がなされており、近年これらをまとめたかたちで南久和氏の考察がある〔南1976〕。しかし、その分類が頗る複雑化しているため、本書ではとりあえず概略的に区別しておく。

註⑤ 爪形土器については、佐原真氏の研究がある〔佐原1965〕。本書はこれに従う。

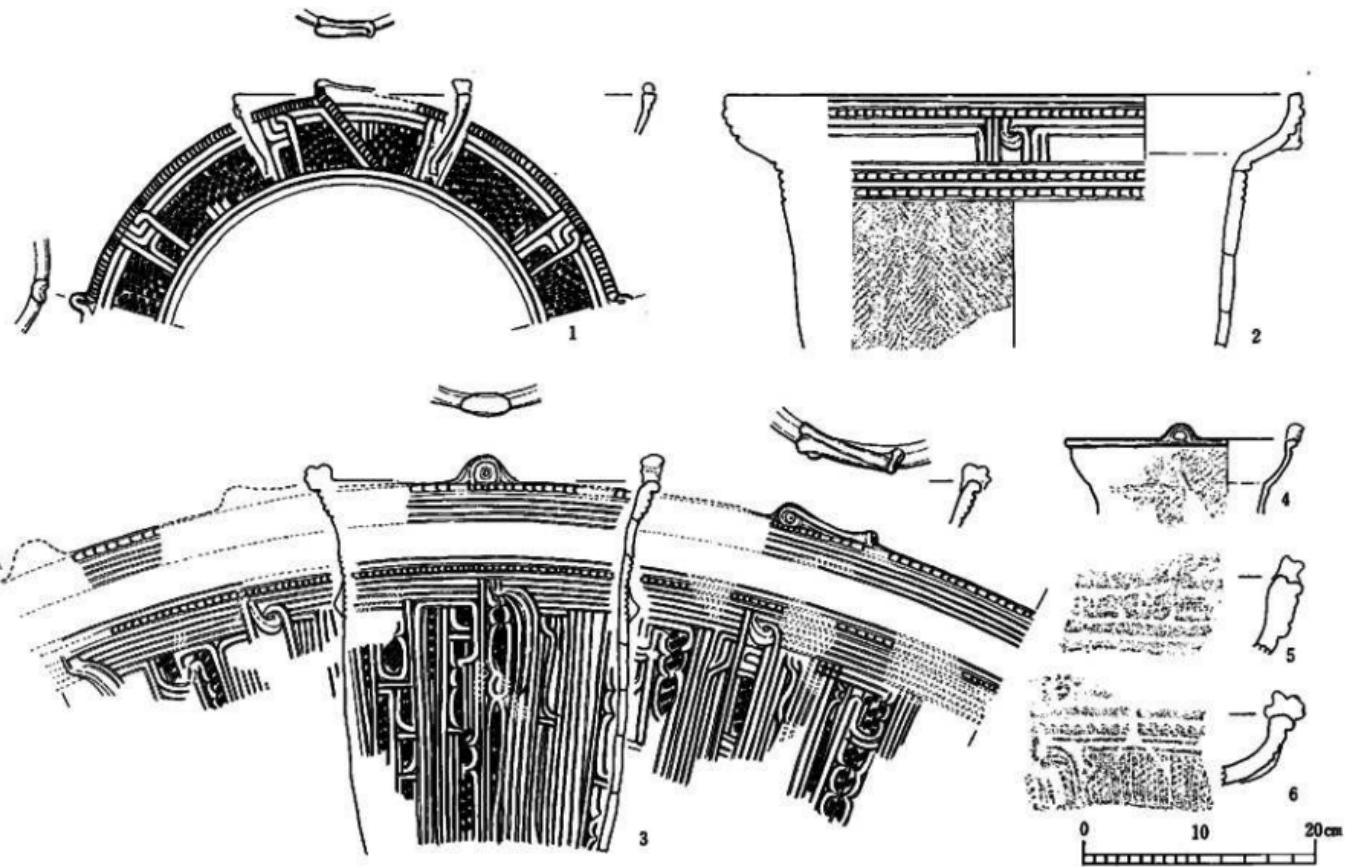
註⑥ 浅鉢形土器については、充分な各期の区分基準をつかんではいない。第14回1・2は、あるいは第1期にはいるかもしれない。

註⑦ 第III章成果において、新崎式と上山田古式を区分しているが、これは後述するように筆者らが、高堀勝喜氏の設定した上山田古式の内容を誤って理解したために行ったものであり、実際は広義の新崎式を新旧に区分したことになる。この点小島俊彰氏より指摘があった。ここに修正しておく。

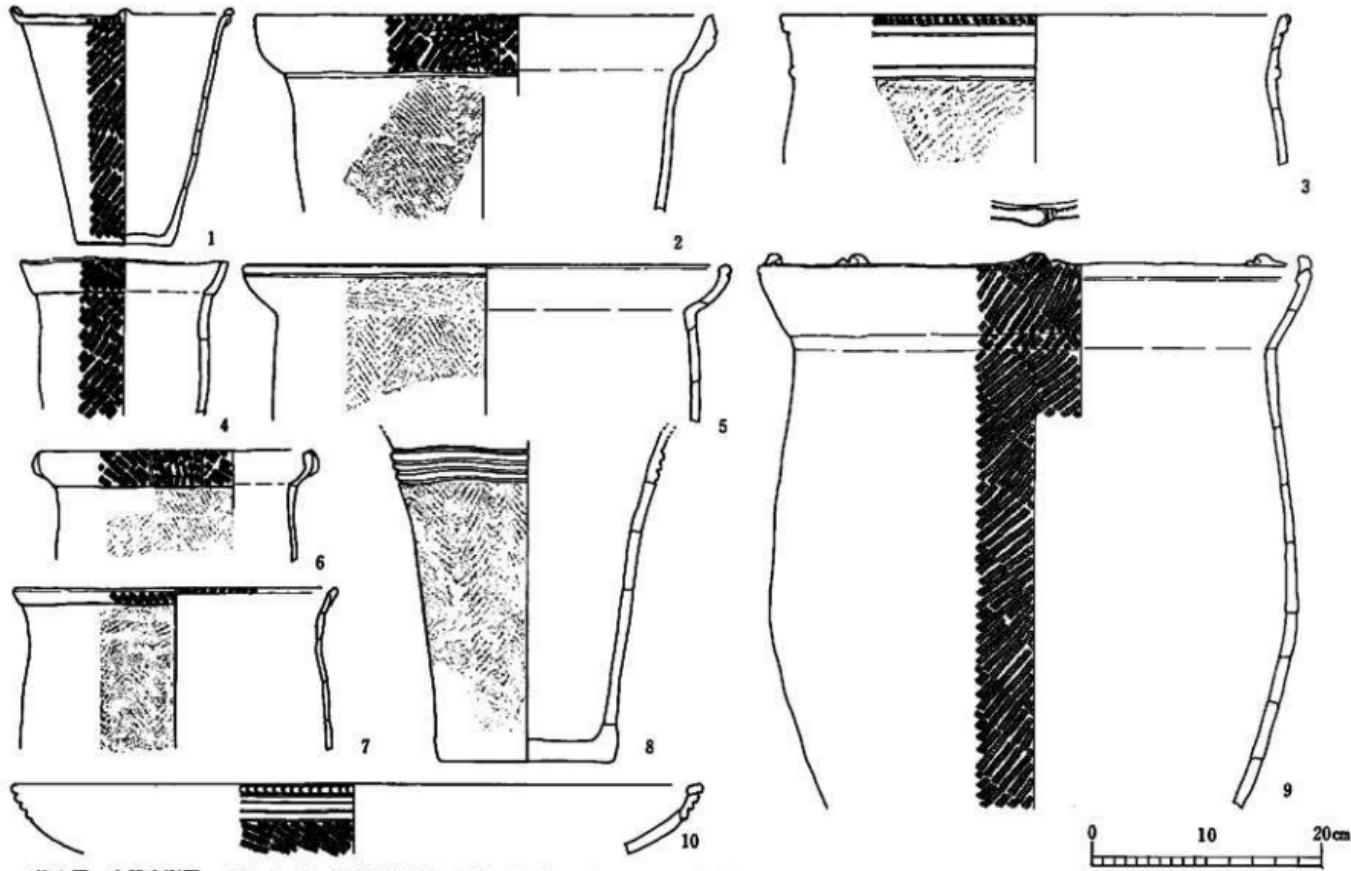
註⑧ 鹿照寺I式を広義の新崎式の古手、巣照寺II式を新崎式、巣照寺III式をほぼ上山田古式に比定したい。なお、広義の新崎式土器の区分については、近年、南久和氏の研究がある〔南1976〕。しかし、具体的な資料は明示されておらず、このため、本遺跡との対比は後日検討していかたい。



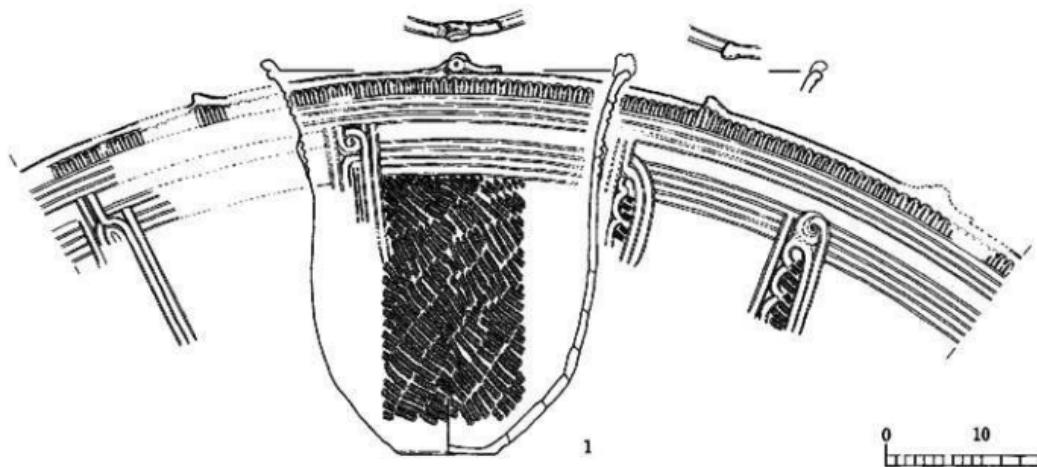
第7図 土器実測図 (3) 1・6.第2地点グリッド 2・3・5.第11号穴付近 4.第3号住居跡



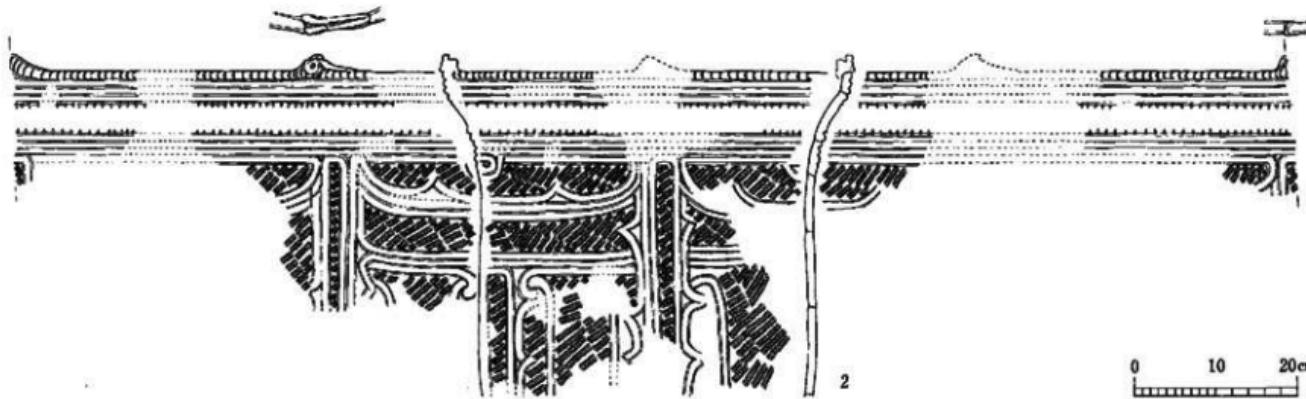
第8図 土器実測・展開図 (分) 1.第1号住居跡 2・3.第1号住居跡付近 4～6.第11号穴付近



第9図 土器実測図 (×) 1・5・8.第5号住居跡 2.第3地点グリッド 3・7・9.第11号穴  
4.第1号住居跡埋甌 6・10.第2地点グリッド

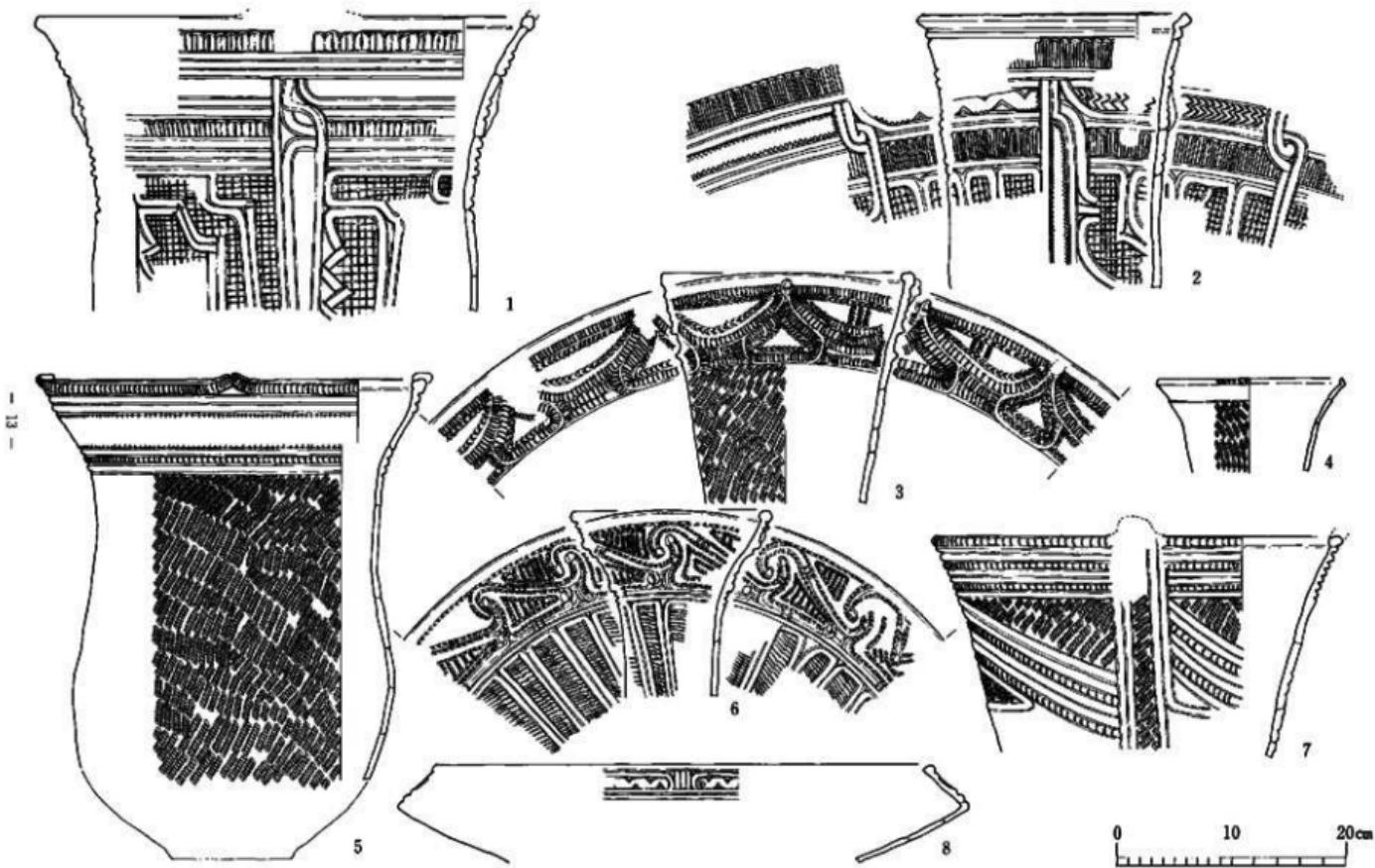


0 10 20cm

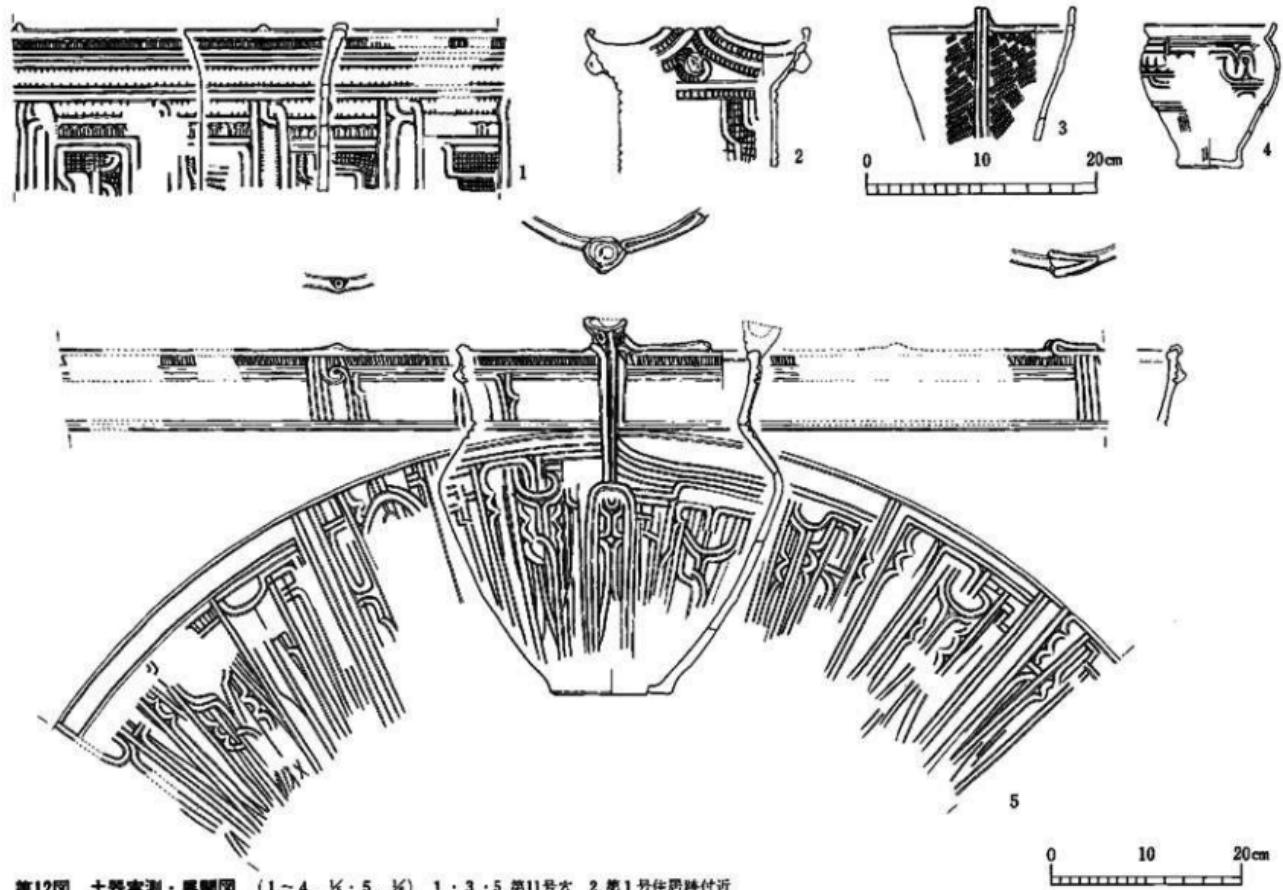


0 10 20cm

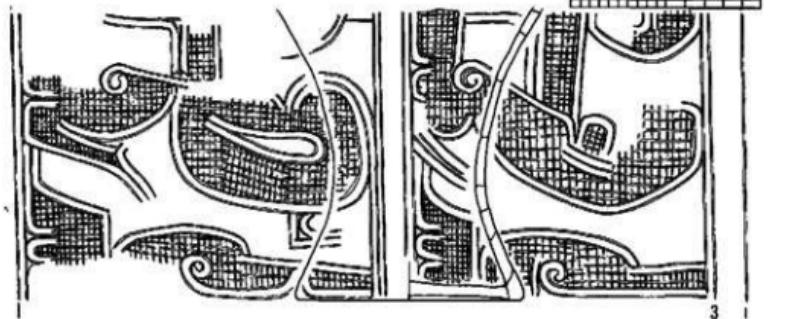
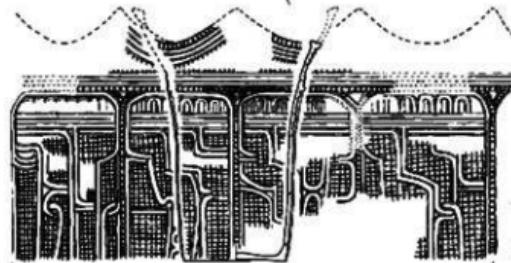
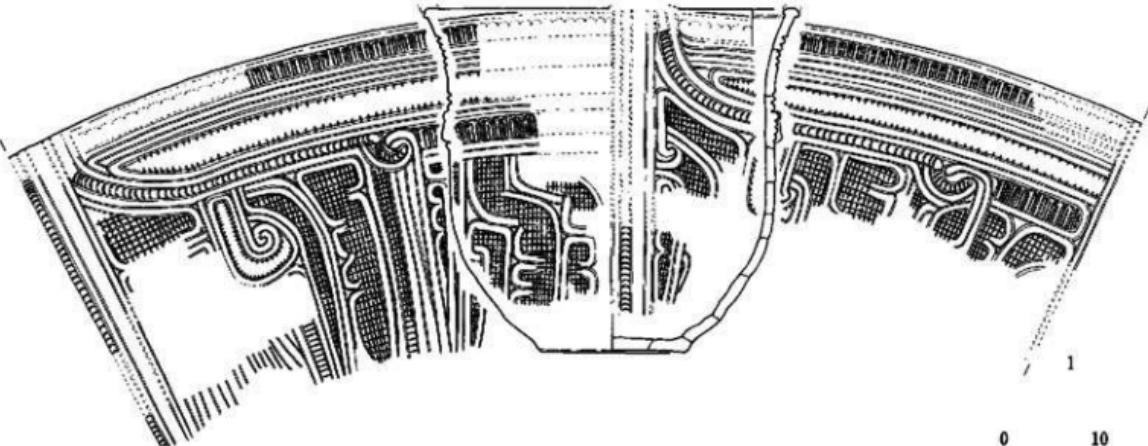
第10図 土器展開図 (1. 1/4, 2. 1/4) 1・2. 第11号穴



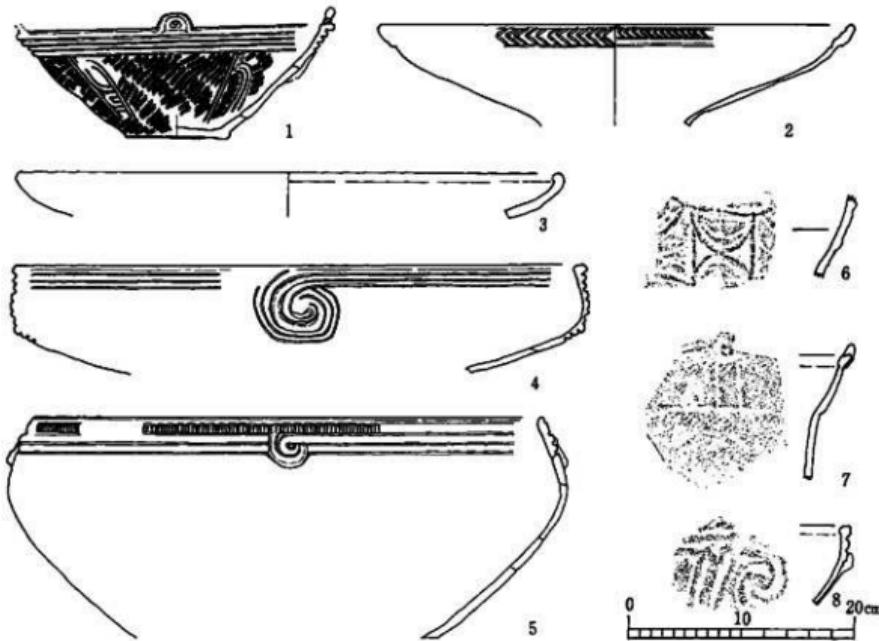
第11図 土器実測・展開図-(6) 1.第3地点グリッド 2.第40号穴 3・5・6・8.第4号住居跡内ピット11  
4.第5号住居跡 7.第11号穴



第12図 土器実測・展開図 (1~4, 6~7, 9) 1・3・5.第11号穴  
2.第1号住居跡付近  
4.第2地点グリッド



第13図 土器実測・展開図 (1. 3%・2・5. 3%) 1・2・4. 第11号穴 3・5. 第2地点グリッド



第14図 土器実測・拓影図 (3) 1・2.第3地点グリッド 3・6.第6号住居跡  
4・6・7.第2地点グリッド 5.第3地点埋蔵

#### 绳文時代の土製品 (第15図1~18、図版第7)

土製品は全て中期前葉に属するものと考えられる。

滑車形耳飾 (第15図1~3) 中央部に穿孔したもの1点、穿孔しないもの2点が出土している。(3)の穿孔は焼成前に両面から加えられている。

袖珍土器 (第15図4~10) 口径4.3~8cm、器高2.7~10cm程度の小型土器である。(5)は鉢形でヘラによつて面取りが行なわれている。ほかに同地点から台付鉢形の例が出土し、他の地点では椭形をはじめ底部・胴部が出土している。用途は不明であるが、手づくねのもの(4・5)、そうでないもの(6~10)があり、後者の作りはていねいで文様で飾られる個体が多い。

人形貼り付け土器 (第15図11) 岐照寺第II期深鉢C型の土器で土器底面部外側に人物像を貼り付ける。頭部・脚部下が欠け、手は制落する。手の状態は左手の指が3本のものを、右肩にあてる。目・鼻・口は切り込まれ、目はつり上がり、口は下に半月状にひらく。関東の勝坂式土器や長野県藤内遺跡に見られる人物装飾土器とは、器種・意図的に異なる。

土偶 (第15図12~15) 12は頭部である。頭頂部は円形で浅く窪む皿状となり、その上には粘土隆帯を「U」字状に貼った跡がある。正面のまゆから鼻・口・脚部へと粘土隆帯を貼って表現しており、まゆにその一部が残っている。目や口は刺突文で小さくつけられる。色調は薄茶色である。他に腕部2個、脚部1個がある。

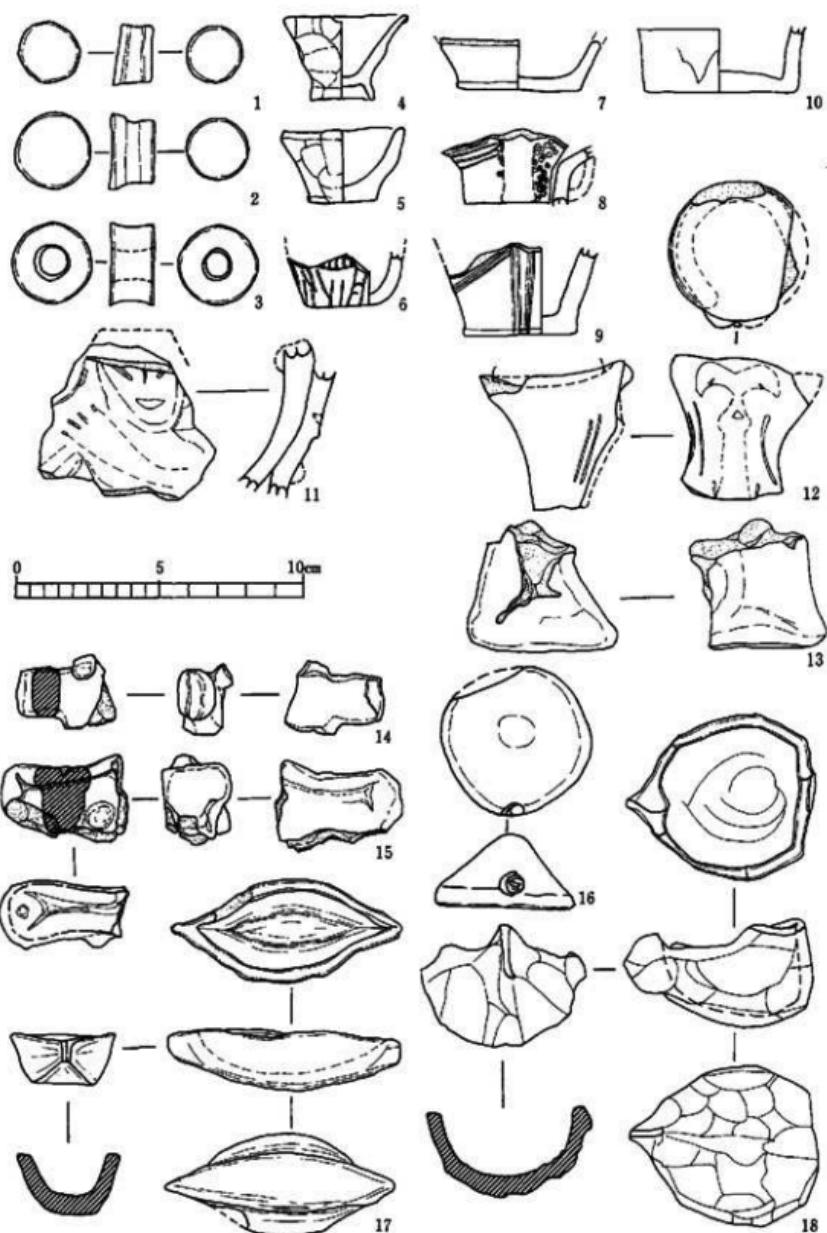
その他の土製品 (第15図16~18) 16は円錐状をし、一方に穴を穿っているが、用途は不明である。(17)は舟状土製品で長さ6cm、幅5.4cmであり、一方が平面になっている。(18)も舟状土製品で長さ8cm、幅3.5cmであり、両端が尖っている。

(松本)

註①類似資料として、山梨県上黒羽遺跡の土偶があり、左手は右の胸にあてている。

註②早川コレクションのなかの福中町長沢遺跡のものに類似する[小島1972]。

註③類似資料として、新潟県下石原遺跡にあり、身体装飾品ではないかとのべている[中村他1973]。また、新潟縣古野屋遺跡では石皿状土製品として報告されている[三条商業高校社会科クラブ1974]。



第15図 土製品実測図 (3/4)

### 縄文時代の石器（第16・17図、図版第8）

出土した石器には、多種多様の器種がある。整理途中であるが、その概数を以下に示す。

石鎌14点・石匙2点・石鍬1点・石鏟45点・打製石斧6点・磨製石斧26点、擦石20点・凹石6点・石皿2点・その他の石器4点である。量的には、石鍬・磨製石斧・擦石・石鎌が多い。

石器は、すべて中期前葉に属するものと考えられる。

石鎌（第16図1～12）すべて無基で、基辺の形状がくぼむものばかりである。石質は、(6)の凝灰岩質、(12)のサヌカイト以外は黒曜石である。

石匙（第16図13・14）横型のもので、形状は、つまみのある三角形である。三角形のものは、片刃が多い（橋本1972）。石質は、サヌカイトと頁岩質である。

石鍬（第16図15）錐の部分が破損しているが、多分、錐の部分が頭部と明瞭に区別され、その基部から末端に至るまでほぼ同じ幅になっていたであろう。石質は、チャートである。

石鏟（第17図1～8）偏平な河原石の両端を打ち欠いて、糸かけをつくる。長さ5～7cm、重さ40～110g前後のものが大半を占める。

磨製石斧（第16図18・19、第17図11～17）長さ12～14cm、幅4.5～6cm、厚さ1.5～3cmの大型品、長さ7～10cm、幅4.5～5cm、厚さ1.5～2.5cmの中型品、長さ4.5cm、幅2～2.5cm、厚さ約1cmの小型品がある。石質は主として蛇紋岩で、刃は、両面からまるくとぎ出して、縦断形が船状を呈する船刃である。擦り切り手法の痕跡や斜刃（金子1969）も見られる（11・15）。

打製石斧（第17図18～21）短骨形・楔形に分かれ、自然面を多く残している。石質は、安山岩・蛇紋岩などである。

擦石（第17図22～25）形状が、円形ないし橢円形のもの、長方形のもの、棒状のもの、三角柱状のものに分けられ、縁辺に摩耗痕がある。石質は、安山岩質などである。

凹石（第17図26～29）橢円形ないし長楕円形の河原石の表裏に2～4の凹をつける。

石皿（第17図30）一方の中央部にレンズ状のくぼみがある。石質は、砂岩である。

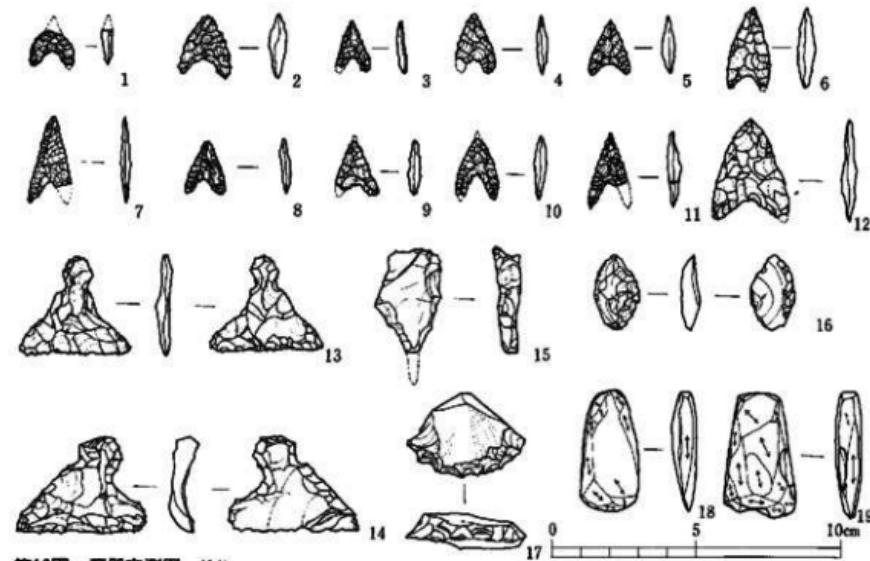
その他の石器（第16図16・17、第17図9・10）黒曜石の剥片の主要剝離面に加工が行われたもの（16）、鉄石英の剥片に刃がつけられたもの（17）、偏平な蛇紋岩の一端を両面から剝離したもの（9・10）がある。

（岡上）

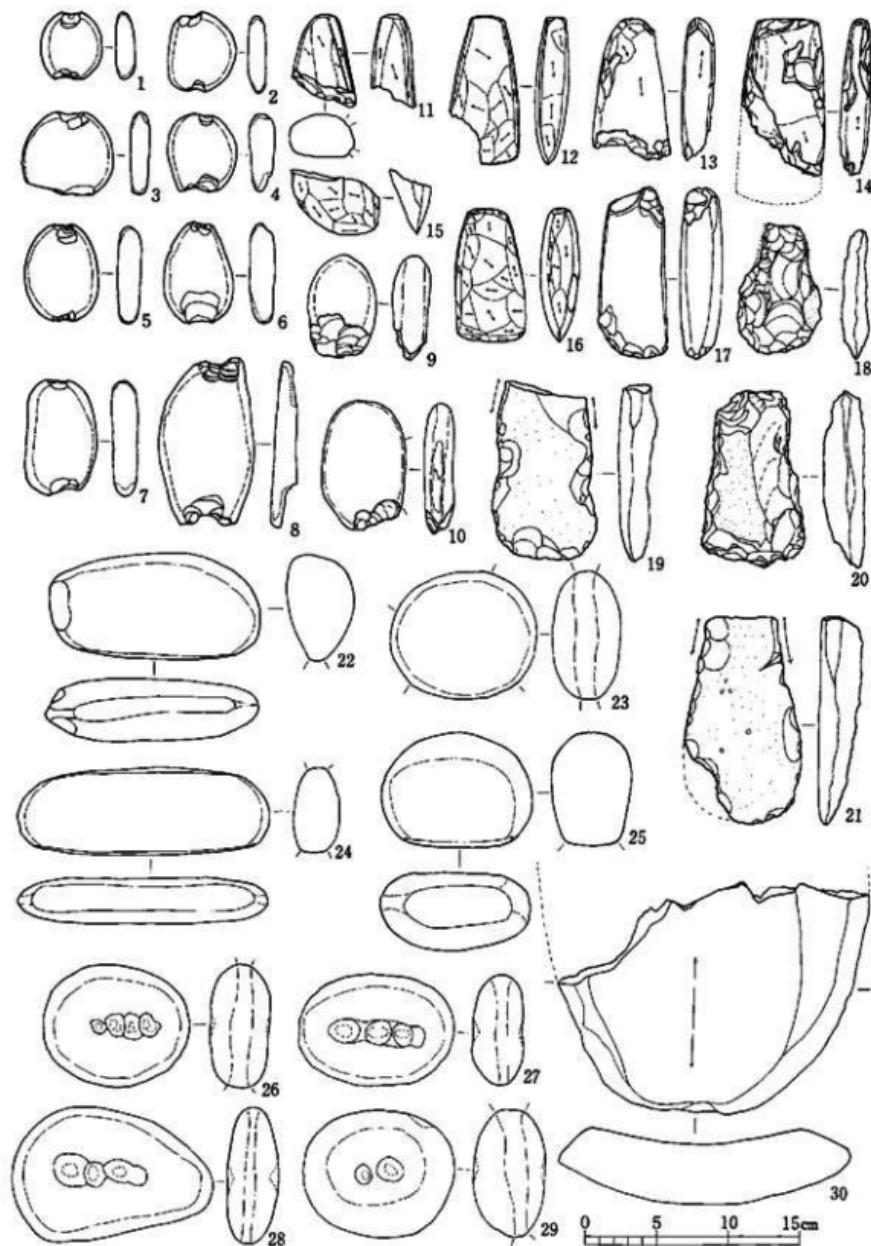
註① このサヌカイト製の石鎌は、縄文時代草創期に属するものと考えられる。この点、橋本正氏の教示による。

註② この黒曜石は、専門家の鑑定を受けていないが、多分、長野県和田町産のものであろう。橋本正氏の教示による。

註③ この石器は、先上器時代に属するナイフ形石器とも考えられる。この点、橋本正氏より指摘があった。



第16図 石器実測図 (3)



第17図 石器実測図 (34)



第18図 第1地点出土の須恵・土器類（写真）

1975)が、土器器の長慶の一例に、より古い8世紀段階の特徴を持つものがある。

この時期の遺物を出土する遺跡は近辺に宮森新北島I遺跡・宮森新大谷島遺跡がある。(松本)  
注① 全般にわたり、橋本正氏の教示を受けた。

#### IV まとめ

前章まで述べた点と問題点を要約し、まとめとする。

1. 蔵照寺遺跡は、縄文時代中期前葉と平安時代の複合遺跡であり、時代的には前者にその中心がある。
2. 本遺跡は、庄川によって形成された芹谷野段丘上に位置し、遺跡の内容からは、川を介した人・物の動きをうかがうことができる。
3. 遺構としては、各地点から住居跡11棟、穴75ヵ所。他に埋葬施設と考えられる埋葬1ヵ所を検出した。遺構は、それらが一つのまとまりとして構成しており、本遺跡の弧状集落は連続するものではなく、群をもって弧状集落を形成するものと考えられる。このような例としては、近くに、庄川町松原遺跡(橋本他1975)がある。
4. 縄文時代中期前葉の土器群(広義の新崎式土器群)は、その土器製作技術の変遷によって再区分し、それを藏照寺I式・同II式・同III式と仮称した。
5. 土製品は、滑車形耳飾・繪珍土器・土偶が多く出土している。他に舟形状のものもあり、これらは縄文時代中期前葉の好資料としてあげられる。
6. 石器としては、石錐・磨製石斧・擦石・石錐が量的に多く、逆に打製石斧が少ない。また、黒曜石の剥片が多量に出土しており。それらのことは、本遺跡の生活基盤を考える上で、今後の重要な問題点といえる。

(神保)

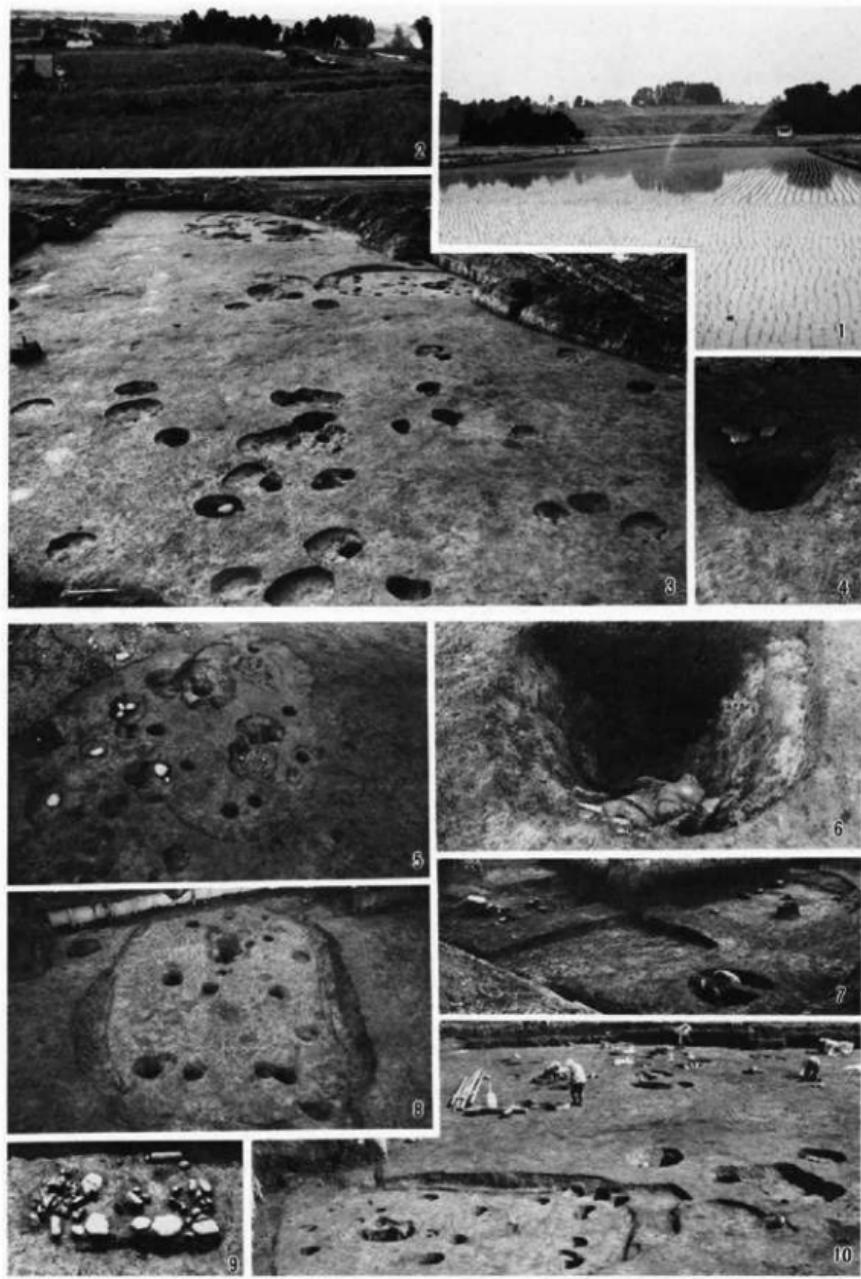
#### 参考文献

- ウ 上野重洋・酒井重洋・神保孝造 1976 「富山県福光町・城端町立野ヶ原遺跡群第4次緊急発掘調査概要」富山県教育委員会  
カ 金子拓男 1969 「中部地方における斜刀石斧と撫拭法」古代文化第21巻3・4号  
キ 桥本雅敏 1975 「遺物」「入善町じょうべのま道跡発掘調査概要(3)」富山県教育委員会  
コ 小林達雄 1968 「多摩ニュータウンNo.46遺跡における吹上バーナーについて」考古学協会発表要旨34  
小島俊彰 1972 「縄文中期(写真土偶)」「富山縣考古編」富山県  
小島俊彰 1973 a 「富山県朝日町下山新道跡第1次発掘調査概報」富山県教育委員会  
小島俊彰 1973 b 「富山県不動堂遺跡の大住居跡」月刊考古学ジャーナル第18号  
小島俊彰 1974 a 「富山県朝日町不動堂遺跡第1次発掘調査概要」富山県教育委員会  
小島俊彰 1974 b 「北條の縄文時代中期の偏年一歳後の研究史と現状」大塔第5号  
小島幸雄 1976 「富山市杉谷道跡発掘調査報告書」富山市教育委員会  
サ 佐原真 1956 「土器面における横立文様の施文方向」石器時代No.3  
椎伯安一 1965 「世の研磨」「砺波市史」砺波市史編纂委員会  
三共商業高等学校社会科クラブ 1974 「吉野道跡」新潟県立三条商業高等学校  
酒井重洋・橋本正春 1977 「富山市宇奈月町浦山寺遺跡緊急発掘調査概要」富山県教育委員会

- シ 新藤正夫 1965 「頃波の自然」『房総市史』房総市史編纂委員会
- 辰野博衛・根津清志・福澤幸一・小池政美 1972 「北丘古跡跡」『長野県中央道埋蔵文化財発掘調査報告書—伊那市西森近一』日本道路公団名古屋支社・長野県教育委員会
- 神保孝造 1976 「遺物について—縄文時代中期前葉の土器」『高山県福光町・城端町立野ヶ原遺跡群第4次緊急発掘調査報告』富山県教育委員会
- タ 高橋勝喜 1970 「原始時代」『七尾市史資料編第4卷』七尾市史編纂専門委員会
- ト 富山考古学会 1951 「富山考古学会報」大坂第1号
- ナ 中村孝三郎・竹田祐司・小林達雄 1973 「千石原」長岡市立科学博物館
- ヌ 沼田啓太郎 1976 「金沢市大桑町中平遺跡報告」石川考古学研究会々報第19号
- ハ 橋本正 1968 「回転押型土器の問題—富山県の場合」大坂第4号
- 橋本正 1971 「漁物の埋没について—小杉町中山南遺跡調査報告書」富山県教育委員会
- 橋本正 1972 「立山町吉峰遺跡—石器」『富山県埋蔵文化財調査報告書告日』富山県教育委員会
- 橋本正・柳井勝・池野正男・神保孝造 1976 「富山県庄川町原源遺跡緊急調査概要」富山県教育委員会
- 橋本正 1976 「堅穴住居の分類と系譜」考古学研究会第23卷第3号
- フ 齋藤富士夫 1971 「須恵器・土師器」『小杉町中山南遺跡調査報告書』富山県教育委員会
- 舟崎久雄 1974 「土器」『富山県埋蔵文化財調査報告書』並びに高瀬川流域入善町七ヶ所への主要遺跡発掘調査報告書』富山県教育委員会
- ミ 渡農・竹内俊一 1971 「安ノ新道跡調査概要」宇奈月町教育委員会
- 南久和 1978 「北陸の縄文中期前葉の偏年に関する一試論」石川考古学研究会々報第9号

地名	発掘場所	平面図	横(幅)×縦(奥)	方	地質	地質・位置(標高)	地の状況	その他の記	その他の	地	地	地
01 第2地点	西側内	4.60m×3.1	N=3° W	北60° E 西60° S	39.4					土壠	土壠	土壠
02	-	4.60m×3.1	N=3° W	北60° E 西60° S	51.0					土壠	土壠	土壠
03	-	2.60m×2.4	N=21° E	北60° E 西60° S	39.4					土壠	土壠	土壠
04 第1地点	精河町	5.02m×4.05m	N=3° W	北60° E 西60° S	39.4					土壠	土壠	土壠
05	-	4.60m×4.1	N=12° E	北60° E 西60° S	37.5					土壠	土壠	土壠
06	-	5.1×2.0		北60° E 西60° S	39.4					土壠	土壠	土壠
07 第2地点	-	5.1×2.0		北60° E 西60° S	39.4					土壠	土壠	土壠
08 第1地点	-	-			北60° E 西60° S	39.4				土壠	土壠	土壠
09 第2地点	不定形	3.6×2.4		北60° E 西60° S	39.4					土壠	土壠	土壠
10 第3地点	-	-			北60° E 西60° S	39.4				土壠	土壠	土壠
11	-	-			北60° E 西60° S	39.4				土壠	土壠	土壠

地名	発掘場所	地図	地	標高	地質	地質	地	地	地	地	地	地
01 第1地点	川 町	9.8×8.0	-	30	第1地点	9.8×8.0	-	9.8	第1地点	9.8×8.0	9.8	9.8
02	精河 町	11.8×7.5	山	3.5	-	9.8×8.0	9.8	土壠	9.8×8.0	9.8×8.0	11.8	11.8
03	-	3.6×2.5	-	30	-	3.6×2.5	30	土壠	3.6×2.5	3.6×2.5	3.6×2.5	3.6×2.5
04	-	10.0×8.0	土壠	34	-	10.0×8.0	34	土壠	10.0×8.0	10.0×8.0	10.0×8.0	10.0×8.0
05	-	10.0×8.0	土壠	35	-	10.0×8.0	35	土壠	10.0×8.0	10.0×8.0	10.0×8.0	10.0×8.0
06	-	10.0×8.0	土壠	36	-	10.0×8.0	36	土壠	10.0×8.0	10.0×8.0	10.0×8.0	10.0×8.0
07	-	10.0×8.0	土壠	37	-	10.0×8.0	37	土壠	10.0×8.0	10.0×8.0	10.0×8.0	10.0×8.0
08	-	10.0×8.0	土壠	38	-	10.0×8.0	38	土壠	10.0×8.0	10.0×8.0	10.0×8.0	10.0×8.0
09	-	10.0×8.0	土壠	39	-	10.0×8.0	39	土壠	10.0×8.0	10.0×8.0	10.0×8.0	10.0×8.0
10	-	10.0×8.0	土壠	40	-	10.0×8.0	40	土壠	10.0×8.0	10.0×8.0	10.0×8.0	10.0×8.0
11	-	10.0×8.0	土壠	41	-	10.0×8.0	41	土壠	10.0×8.0	10.0×8.0	10.0×8.0	10.0×8.0
12	-	10.0×8.0	土壠	42	-	10.0×8.0	42	土壠	10.0×8.0	10.0×8.0	10.0×8.0	10.0×8.0
13	-	10.0×8.0	土壠	43	-	10.0×8.0	43	土壠	10.0×8.0	10.0×8.0	10.0×8.0	10.0×8.0
14	-	10.0×8.0	土壠	44	-	10.0×8.0	44	土壠	10.0×8.0	10.0×8.0	10.0×8.0	10.0×8.0
15	-	10.0×8.0	土壠	45	-	10.0×8.0	45	土壠	10.0×8.0	10.0×8.0	10.0×8.0	10.0×8.0
16	-	10.0×8.0	土壠	46	-	10.0×8.0	46	土壠	10.0×8.0	10.0×8.0	10.0×8.0	10.0×8.0
17	第1地点	10.0×8.0	土壠	47	-	10.0×8.0	47	土壠	10.0×8.0	10.0×8.0	10.0×8.0	10.0×8.0
18	-	10.0×8.0	土壠	48	-	10.0×8.0	48	土壠	10.0×8.0	10.0×8.0	10.0×8.0	10.0×8.0
19	-	10.0×8.0	土壠	49	-	10.0×8.0	49	土壠	10.0×8.0	10.0×8.0	10.0×8.0	10.0×8.0
20	-	10.0×8.0	土壠	50	-	10.0×8.0	50	土壠	10.0×8.0	10.0×8.0	10.0×8.0	10.0×8.0
21	-	10.0×8.0	土壠	51	-	10.0×8.0	51	土壠	10.0×8.0	10.0×8.0	10.0×8.0	10.0×8.0
22	-	10.0×8.0	土壠	52	-	10.0×8.0	52	土壠	10.0×8.0	10.0×8.0	10.0×8.0	10.0×8.0
23	-	10.0×8.0	土壠	53	-	10.0×8.0	53	土壠	10.0×8.0	10.0×8.0	10.0×8.0	10.0×8.0
24	-	10.0×8.0	土壠	54	-	10.0×8.0	54	土壠	10.0×8.0	10.0×8.0	10.0×8.0	10.0×8.0
25	-	10.0×8.0	土壠	55	-	10.0×8.0	55	土壠	10.0×8.0	10.0×8.0	10.0×8.0	10.0×8.0
26	-	10.0×8.0	土壠	56	-	10.0×8.0	56	土壠	10.0×8.0	10.0×8.0	10.0×8.0	10.0×8.0
27	-	10.0×8.0	土壠	57	-	10.0×8.0	57	土壠	10.0×8.0	10.0×8.0	10.0×8.0	10.0×8.0
28	-	10.0×8.0	土壠	58	-	10.0×8.0	58	土壠	10.0×8.0	10.0×8.0	10.0×8.0	10.0×8.0
29	-	10.0×8.0	土壠	59	-	10.0×8.0	59	土壠	10.0×8.0	10.0×8.0	10.0×8.0	10.0×8.0
30	-	10.0×8.0	土壠	60	-	10.0×8.0	60	土壠	10.0×8.0	10.0×8.0	10.0×8.0	10.0×8.0
31	-	10.0×8.0	土壠	61	-	10.0×8.0	61	土壠	10.0×8.0	10.0×8.0	10.0×8.0	10.0×8.0
32	-	10.0×8.0	土壠	62	-	10.0×8.0	62	土壠	10.0×8.0	10.0×8.0	10.0×8.0	10.0×8.0
33	-	10.0×8.0	土壠	63	-	10.0×8.0	63	土壠	10.0×8.0	10.0×8.0	10.0×8.0	10.0×8.0
34	-	10.0×8.0	土壠	64	-	10.0×8.0	64	土壠	10.0×8.0	10.0×8.0	10.0×8.0	10.0×8.0
35	-	10.0×8.0	土壠	65	-	10.0×8.0	65	土壠	10.0×8.0	10.0×8.0	10.0×8.0	10.0×8.0
36	-	10.0×8.0	土壠	66	-	10.0×8.0	66	土壠	10.0×8.0	10.0×8.0	10.0×8.0	10.0×8.0
37	-	10.0×8.0	土壠	67	-	10.0×8.0	67	土壠	10.0×8.0	10.0×8.0	10.0×8.0	10.0×8.0
38	-	10.0×8.0	土壠	68	-	10.0×8.0	68	土壠	10.0×8.0	10.0×8.0	10.0×8.0	10.0×8.0
39	-	10.0×8.0	土壠	69	-	10.0×8.0	69	土壠	10.0×8.0	10.0×8.0	10.0×8.0	10.0×8.0
40	-	10.0×8.0	土壠	70	-	10.0×8.0	70	土壠	10.0×8.0	10.0×8.0	10.0×8.0	10.0×8.0
41	-	10.0×8.0	土壠	71	-	10.0×8.0	71	土壠	10.0×8.0	10.0×8.0	10.0×8.0	10.0×8.0
42	-	10.0×8.0	土壠	72	-	10.0×8.0	72	土壠	10.0×8.0	10.0×8.0	10.0×8.0	10.0×8.0
43	-	10.0×8.0	土壠	73	-	10.0×8.0	73	土壠	10.0×8.0	10.0×8.0	10.0×8.0	10.0×8.0
44	-	10.0×8.0	土壠	74	-	10.0×8.0	74	土壠	10.0×8.0	10.0×8.0	10.0×8.0	10.0×8.0
45	-	10.0×8.0	土壠	75	-	10.0×8.0	75	土壠	10.0×8.0	10.0×8.0	10.0×8.0	10.0×8.0
46	-	10.0×8.0	土壠	76	-	10.0×8.0	76	土壠	10.0×8.0	10.0×8.0	10.0×8.0	10.0×8.0
47	-	10.0×8.0	土壠	77	-	10.0×8.0	77	土壠	10.0×8.0	10.0×8.0	10.0×8.0	10.0×8.0
48	-	10.0×8.0	土壠	78	-	10.0×8.0	78	土壠	10.0×8.0	10.0×8.0	10.0×8.0	10.0×8.0
49	-	10.0×8.0	土壠	79	-	10.0×8.0	79	土壠	10.0×8.0	10.0×8.0	10.0×8.0	10.0×8.0
50	-	10.0×8.0	土壠	80	-	10.0×8.0	80	土壠	10.0×8.0	10.0×8.0	10.0×8.0	10.0×8.0
51	-	10.0×8.0	土壠	81	-	10.0×8.0	81	土壠	10.0×8.0	10.0×8.0	10.0×8.0	10.0×8.0
52	-	10.0×8.0	土壠	82	-	10.0×8.0	82	土壠	10.0×8.0	10.0×8.0	10.0×8.0	10.0×8.0
53	-	10.0×8.0	土壠	83	-	10.0×8.0	83	土壠	10.0×8.0	10.0×8.0	10.0×8.0	10.0×8.0
54	-	10.0×8.0	土壠	84	-	10.0×8.0	84	土壠	10.0×8.0	10.0×8.0	10.0×8.0	10.0×8.0
55	-	10.0×8.0	土壠	85	-	10.0×8.0	85	土壠	10.0×8.0	10.0×8.0	10.0×8.0	10.0×8.0
56	-	10.0×8.0	土壠	86	-	10.0×8.0	86	土壠	10.0×8.0	10.0×8.0	10.0×8.0	10.0×8.0
57	-	10.0×8.0	土壠	87	-	10.0×8.0	87	土壠	10.0×8.0	10.0×8.0	10.0×8.0	10.0×8.0
58	-	10.0×8.0	土壠	88	-	10.0×8.0	88	土壠	10.0×8.0	10.0×8.0	10.0×8.0	10.0×8.0
59	-	10.0×8.0	土壠	89	-	10.0×8.0	89	土壠	10.0×8.0	10.0×8.0	10.0×8.0	10.0×8.0
60	-	10.0×8.0	土壠	90	-	10.0×8.0	90	土壠	10.0×8.0	10.0×8.0	10.0×8.0	10.0×8.0
61	-	10.0×8.0	土壠	91	-	10.0×8.0	91	土壠	10.0×8.0	10.0×8.0	10.0×8.0	10.0×8.0
62	-	10.0×8.0	土壠	92	-	10.0×8.0	92	土壠	10.0×8.0	10.0×8.0	10.0×8.0	10.0×8.0
63	-	10.0×8.0	土壠	93	-	10.0×8.0	93	土壠	10.0×8.0	10.0×8.0	10.0×8.0	10.0×8.0
64	-	10.0×8.0	土壠	94	-	10.0×8.0	94	土壠	10.0×8.0	10.0×8.0	10.0×8.0	10.0×8.0
65	-	10.0×8.0	土壠	95	-	10.0×8.0	95	土壠	10.0×8.0	10.0×8.0	10.0×8.0	10.0×8.0
66	-	10.0×8.0	土壠	96	-	10.0×8.0	96	土壠	10.0×8.0	10.0×8.0	10.0×8.0	10.0×8.0
67	-	10.0×8.0	土壠	97	-	10.0×8.0	97	土壠	10.0×8.0	10.0×8.0	10.0×8.0	10.0×8.0
68	-	10.0×8.0	土壠	98	-	10.0×8.0	98	土壠	10.0×8.0	10.0×8.0	10.0×8.0	10.0×8.0
69	-	10.0×8.0	土壠	99	-	10.0×8.0	99	土壠	10.0×8.0	10.0×8.0	10.0×8.0	10.0×8.0
70	-	10.0×8.0	土壠	100	-	10.0×8.0	100	土壠	10.0×8.0	10.0×8.0	10.0×8.0	10.0×8.0
71	-	10.0×8.0	土壠	101	-	10.0×8.0	101	土壠	10.0×8.0	10.0×8.0	10.0×8.0	10.0×8.0
72	-	10.0×8.0	土壠	102	-	10.0×8.0	102	土壠	10.0×8.0	10.0×8.0	10.0×8.0	10.0×8.0
73	-	10.0×8.0	土壠	103	-	10.0×8.0	103	土壠	10.0×8.0	10.0×8.0	10.0×8.0	10.0×8.0
74	-	10.0×8.0	土壠	104	-	10.0×8.0	104	土壠	10.0×8.0	10.0×8.0	10.0×8.0	10.0×8.0
75	-	10.0×8.0	土壠	105	-	10.0×8.0	105	土壠	10.0×			



**図版第1 第1地点** 1.道路遺跡(西より) 2.第1地点全景(東より) 3.発掘区全景(東より) 4.第18号穴遺物出土状況  
5.第4号住居跡付近(南より) 6.第4号住居跡内ピット11の遺物出土状況 7.第5号住居跡の遺物出土状況及  
び層位 8.第6号住居跡と第31号穴(南より) 9.第6号住居跡の石組炉? 10.第5号住居跡付近と作業風景



図版第2 第2地点  
 1.第2地点全景(東南より) 2.発掘区全景(北より) 3.作業風景 4-5.第1号住居路遺物出土状況  
 6.第1号住居跡の遺物出土状況と層位 7.第1号住居路の埋甃 8.第1号住居路(南より)  
 9.第2・3・9号住居路(東より) 10.第15号穴と層位



図版第3 第3地点 1.第3地点全景(北西より) 2.作業風景 3.発掘区全景(南より) 4・5.遺物出土状況 6.埋甕の出土状況と層位 7.埋甕の出土状況と層位 8.埋甕の出土状況 9.第5号穴の層位 10.第5号穴付近  
(東より)



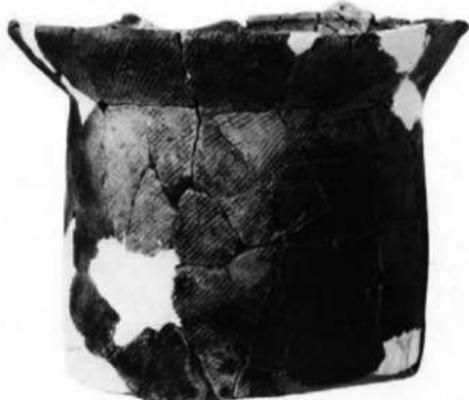
1



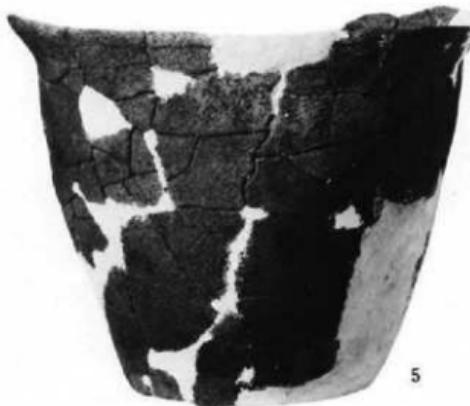
2



3



4



5



6

図版第4 土器 (4)



1



3



2



4

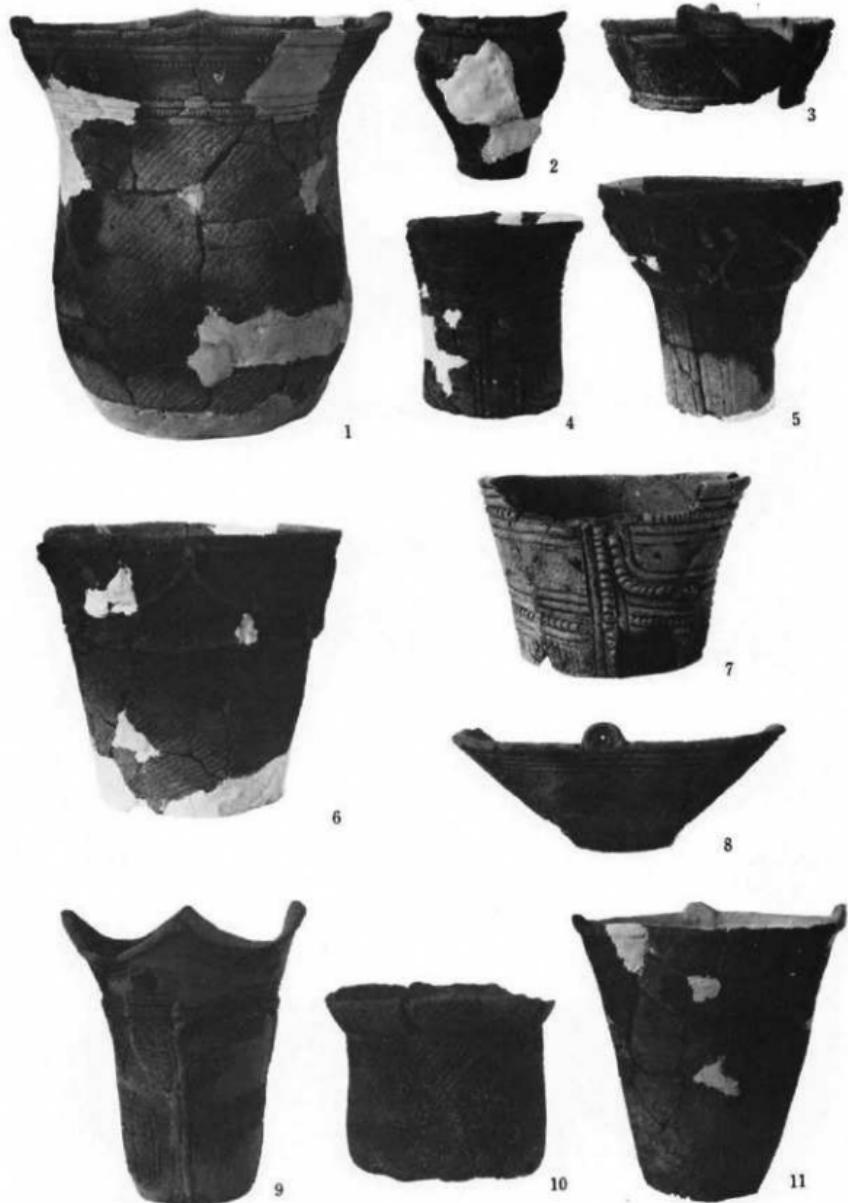


5



6

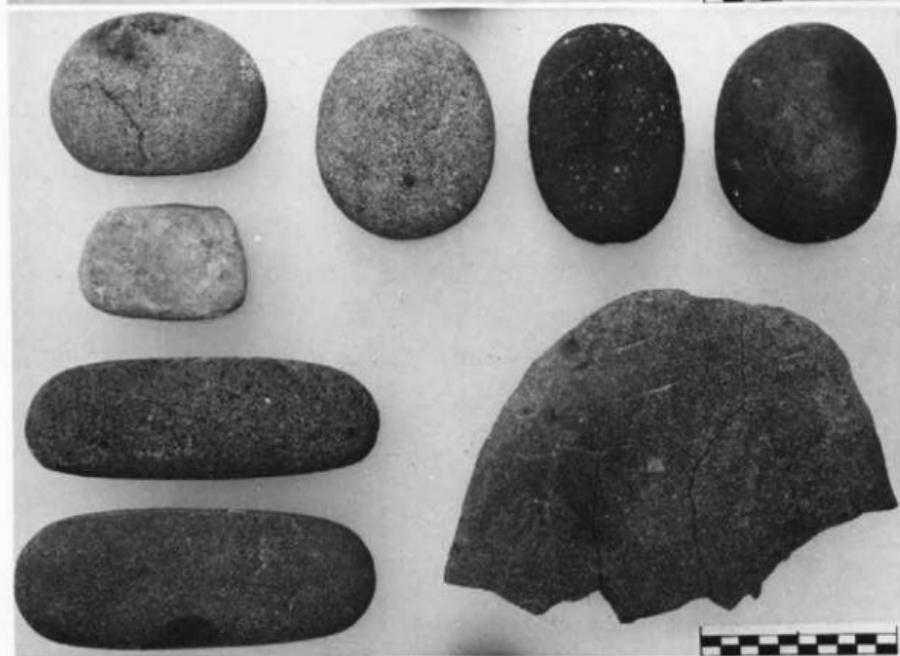
図版第5 土器 (34)



図版第6 土器 (1, 3・その他34)



图版第7 土制品・石器 (36)



图版第8 石器 (3分)



富山県砺波市  
嚴照寺遺跡緊急発掘調査概要

発行日 昭和52年3月31日

発行者 富山県教育委員会

編著者 神保孝造・岡上進一・松本幸治

印刷者 有限会社 日本海印刷